

研究紀要 22

目次

山梨県出土の人面・土偶裝飾付深鉢形土器	渡辺 誠 1
環磔方形配石遺構の復元について —塩瀬下原遺跡敷石住居から—	末木 健 11
縄文時代の剥片剥離手法 —酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—	保坂 康夫 27
山梨県出土の畿内糸叩き甕に関する覚書 —甲府市塩部遺跡の調査から—	小林 健二 35
笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理	石神 孝子 41
山梨県における月待信仰について —二十三夜和讃(一)—	坂本 美夫 54 (1)

序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターにおける日頃の研究成果の一端を掲載した『研究紀要』第22号を刊行する運びとなりました。

今回は、6編の論文を掲載しました。巻頭の拙稿「山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器」では、長野県とともに人面・土偶装飾付深鉢形土器の中心的地域である山梨県下の資料について、今まで発表したりストを整理し、特に分布に重点を置いて若干の検討を試みました。末本健「環濠方形配石遺構の復元について—塩瀬下原遺跡敷石住居から—」では、大月市梁川町に所在する塩瀬下原遺跡から発見された環濠方形配石遺構について、上層の配石と下層にある敷石住居とを関連づけて検討を加えました。保坂康夫「縄文時代の剥片剥離手法—酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—」では、北杜市長坂町に所在する酒呑場遺跡から出土した黒曜石石核について、剥片剥離のあり方を観察し、縄文時代の剥片剥離手法の復原を試みました。小林健二「山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書—甲府市塩部遺跡の調査から—」では、塩部遺跡における最新の調査成果をもとに、山梨県では出土例の少ない畿内系の叩き甕について検討しました。石神孝子「笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理」では、1948（昭和23）年に亀甲塚古墳から発見された管玉について、X線による写真撮影をもとに再整理しました。坂本美夫「山梨県における月待信仰について—二十三夜和讃（一）—」では、都留市博物館「ミュージアム都留」図書室所蔵の和讃『なむあみだぶつ』の中に収められている二十三夜和讃を紹介し、都留市域で行われていた月待信仰の行事形態について考察しました。

県立考古博物館ならびに埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財の調査研究や保存・活用をととして県民の皆様が山梨の歴史を理解していただけるよう創意工夫することが求められています。本誌が山梨の歴史を紐解く契機となり、より身近に地域の歴史を感じていただける場を県民の皆様にご提供できるよう希望するとともに、各位からのご教示と忌憚のないご批判をいただけますようお願い申し上げます。

2006年 3月

山梨県立考古博物館館長
山梨県埋蔵文化財センター所長

渡 辺 誠

山梨県出土の人面・土偶裝飾付深鉢形土器

渡 辺 誠

- 1 はじめに
- 2 出土遺跡の分布

- 3 数量・分布と編年
- 4 おわりに

1 はじめに

筆者は吉本洋子氏との共同研究として、人面・土偶（人面文を含む）裝飾付土器のうち深鉢形土器について、その基礎資料の集成と若干の検討を行い、「日本考古学」誌上に3度に亘って発表してきた（吉本・渡辺1994・99、2005）。その主要な成果は、それらの土器は山梨県が長野県とともに発達した中心地域であること、死と再生觀念の発達をよく示していることと理解できるようになったことなどである。

人面・土偶裝飾付深鉢形土器は表1に示すように、北海道西南部から岐阜県にかけての東北日本の453遺跡より750点出土している。このうち遺跡数においては長野県がもっとも多く112遺跡で、全体の約四分の一にあたる24.7%を占め、山梨県はこれに次ぎ72遺跡で15.9%を占めている。両県を合わせると約40%を占めている。隣接する東京都・神奈川県もこれらに近いが、点数においては大きな落差がある。

遺跡数と同様にもっとも点数の多いのは長野県で、179点、23.9%を占め、次いで山梨県が168点、22.4%を占めている。遺跡数に比べると長野県とほぼ同数とみることが出来る。両県を合わせると約46%を占め、発達した中心地域であることを明示している。図1はこの数量分布を示すものであるが、従来発表してきた分布図と異なるのは、発達した中心地域を的確に示すため、面積の広い長野県を東信・北信・中信・南信とに分けて示したことである（図1）。

上記のように長野県全体で179点出土しているが、4地域ではそれぞれ6・1・28・144点で、南信が圧倒的に多い。南信地域は、茅野市・岡谷市、諏訪郡原村・富士見町、および伊那谷の諸市町村であるが、この点数に匹敵する県は山梨県のみで、大きな差はあるが東京都・神奈川県、および福島県がこれに次いでいる。そして、山梨県を中心に南信・東京都・神奈川県地域は、人面・土偶裝飾付深鉢形土器の最盛期である、縄文中期前半の勝飯文化圏に相当する。

本稿は、この中心的な地域である山梨県下の資料について、3回にわたって発表したりストを整理し、特に分布に重点を置いて若干の検討を試みるものである。

2 出土遺跡の分布

山梨県出土の人面・土偶裝飾付深鉢形土器は、72遺跡出土の168点である（表2）。ただし本稿では分布の検討に重点を置いているので、その法量については省略した。これについては旧稿を参照して頂きたい。また写真についても各タイプの代表的な例のみとし、同様に旧稿を参照して頂きたい。

山梨県の人面・土偶裝飾付深鉢形土器出土遺跡の分布は、図2に示すとおりであるが、それらは次の9群に分類される。

- I群：県東部の上野原市などの地域。8遺跡、10点。
- II群：甲府盆地東部の甲州・笛吹市東部地域。13遺跡、63点。
- III群：甲府盆地南部の笛吹市西部・川中道町などの地域。9遺跡、18点。
- IV群：甲府盆地中央低地域。1遺跡、1点。
- V群：甲府盆地西北部の峯崎市・旧武川村などの地域。10遺跡、26点。
- VI群：茅ヶ岳西麓・八ツ岳東南麓の北杜市地域。18遺跡、41点。
- VII群：長野県に接する旧小淵沢町地域。7遺跡、7点。
- VIII群：甲府盆地西部の南アルプス市地域。3遺跡、4点。
- IX群：県南部の旧高沢・南部町地域。2遺跡、2点。

以上によって、分布の主要地域は甲府盆地と茅ヶ岳西麓・八ツ岳東南麓部であることが分かる。方墳山と富士山の間は無縁であり、県南部地域にはごく僅かにしかみられず対照的である。巨視的にはII・III群地域と、V～VII群地域が特に注目される地域である。

そして発達した過程を知る上で重要な形態分類の基準は、図2に示すとおりである。それは人面の付く高さを示すI～IVと、その向きを示すA～Cとが基準であり、不明なものはそれぞれVとDとを加え、タイプはその組合せで示している（写真1）。特にIV類はもっとも発達したタイプで、かつて顔面把手と言われていた形態で、山梨県に分布の中心がある。

まず人面の高さは、Iは胴部に、IIは上縁部直下に付き、IIIは口縁部に突出し、IVはそれが立体化・中空化・大型

表1 都道府県別人面・土偶裝飾付深鉢形土器数量表

	遺跡数 (%)	資料数 (%)
北海道	3 (0.7)	3 (0.4)
青森	15 (3.3)	26 (3.5)
秋田	3 (0.7)	3 (0.4)
山形	1 (0.2)	1 (0.1)
岩手	9 (2.0)	10 (1.3)
宮城	4 (0.9)	9 (1.2)
福島	29 (6.4)	52 (6.9)
茨城	6 (1.3)	6 (0.8)
栃木	10 (2.2)	17 (2.3)
群馬	13 (2.9)	19 (2.5)
千葉	8 (1.8)	11 (1.5)
埼玉	24 (5.3)	32 (4.3)
東京	63 (13.9)	99 (13.2)
神奈川	42 (9.3)	52 (6.9)
新潟	19 (4.2)	29 (3.9)
富山	1 (0.2)	1 (0.1)
山梨	72 (15.9)	168 (22.4)
長野	112 (24.7)	179 (23.9)
岐阜	6 (1.3)	8 (1.1)
静岡	13 (2.9)	26 (3.3)
計	453 (100.0)	750 (100.0)

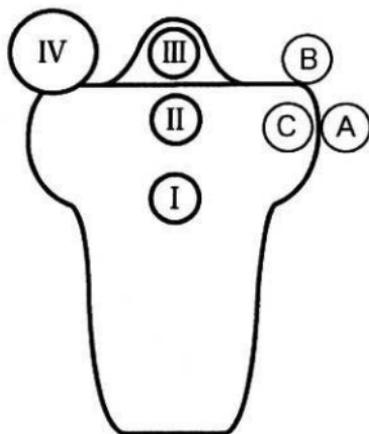


図3 人面・土偶裝飾付深鉢形土器の分類基準図

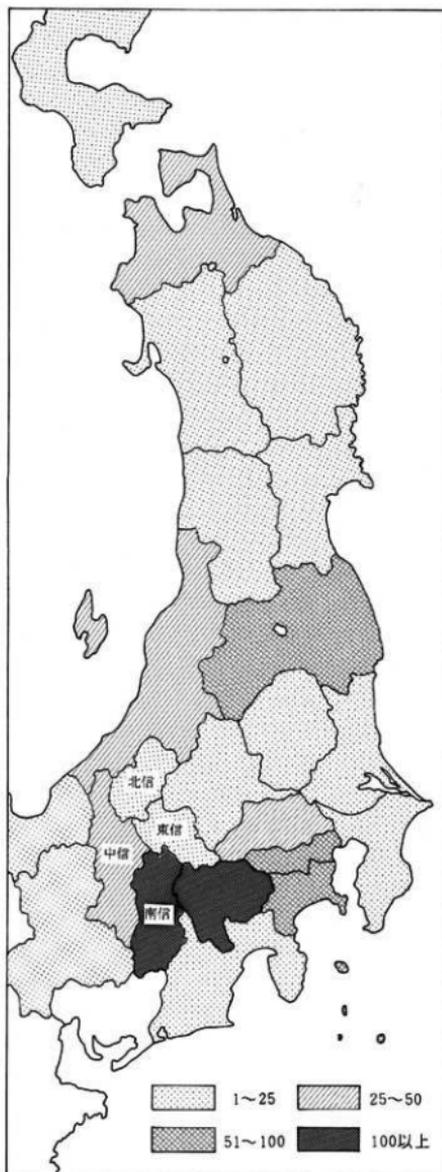


図1 都道府県別人面・土偶裝飾付深鉢形土器出土数
(長野県のみ細分)

表2 山梨県出土の土偶・土俵裝飾付深鉢形土器一覽表(1遺跡2例漏れ、文末参照)

群	遺跡番号	旧番号	遺跡名	タイプ	時期	文献	所蔵者・機関
I	1	149	南部留郡追志村神地遺跡	IVD	勝坂Ⅱ式	江坂1974、中村・奥1974	留留市教委
	2	追127	上野原市狐原遺跡	IVD		未報告	上野原市教委
	3	150	上野原市(旧上野原町)本町遺跡	III D		仁科1935	不明
	4	追129	上野原市上野原小学校遺跡1	IVC	勝内式	小西1993	上野原市教委
			上野原市上野原小学校遺跡2	IVB	井戸尻Ⅲ式	小西1993	上野原市教委
	5	追128	上野原市大塚Ⅱ遺跡	IVC	勝内式	奥山1998	同遺跡調査団
		151	上野原市(旧上野原町)大塚Ⅱ遺跡	IVC	中期	未報告	不明
	6	152	上野原市(旧上野原町)西原田和遺跡	V		中村1970	不明
7	153	大月市高浜町宮谷遺跡	III C	勝坂Ⅰ式	谷口他1966	山本寿々夫氏	
8	追61	都留市丸鬼Ⅱ遺跡	IV A	井戸尻Ⅲ式	高野他1996	山梨県埋文	
9	155	甲州市(旧塩山市竹倉)乙木田遺跡	IVD	勝坂Ⅲ式	上川名1971	不明	
10	154	甲州市(旧塩山市中萩原)柳田遺跡1(北原)	IVC	勝坂Ⅱ式	上川名1971	不明	
		甲州市(旧塩山市中萩原)柳田遺跡2(北原)	IVC	勝坂Ⅱ式	上川名1971	不明	
11	156	甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡1	IVD	勝坂Ⅱ式	小林1978	山梨県立考古博	
		甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡2	IVC	勝坂Ⅱ式	小林1978	山梨県立考古博	
		甲州市(旧塩山市)安道寺遺跡3	IVC	勝坂Ⅲ式	小林1978	山梨県立考古博	
12	追130	甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡1	II A	五領ヶ台式	石神他2003	山梨県埋文	
		甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡2	III C	新近式	石神他2003	山梨県埋文	
		甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡3	IV A	五領ヶ台式	石神他2003	山梨県埋文	
		甲州市(旧塩山市)大木戸遺跡4	IVC	勝坂Ⅱ式	石神他2003	山梨県埋文	
13	157	甲州市(旧塩山市)上於宮遺跡	IVC	勝坂Ⅱ式	野中1904	東京総合資料館	
14	158	甲州市(旧塩山市)岩堂遺跡	IVC	勝坂Ⅱ式	仁科1935	内田周氏	
15	追131	山梨市高畑遺跡	D II A	井戸尻Ⅱ式	未報告	山梨市教委	
16	159	甲州市(旧勝沼町)小佐手遺跡	IVD	勝坂Ⅲ式	尾形1924	不明	
17	160	甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡1	IVD		未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡2	IVD		未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡3	IVC	勝坂Ⅱ式	未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡4	II A	竇沢式	未報告	釈迦堂遺跡博	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡5	II A	竇沢式	未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡6	II A	竇沢式	未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡7	II A	竇沢式	未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡8	II A	竇沢式	未報告	甲州市教委	
		甲州市(旧勝沼町)宮之上遺跡9	II A	五領ヶ台式-竇沢式	未報告	甲州市教委	
18	161	笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区1	II A	井戸尻式	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区2	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区3	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区4	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区5	III D	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区6	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区7	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区8	IV A	中期前半	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区9	II A	中期	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区10	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区11	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区12	IVC	勝坂Ⅱ式	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区13	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区14	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区15	IVD		小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区16	II A	井戸尻Ⅲ式	小野1987	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区17	II A	竇沢式	山梨考古博2004	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群三口神平地区18	III A	竇沢式	山梨考古博2004	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群群域北A地区	D III C	中期前半	小野1986	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群群域北B地区	III A	五領ヶ台式	小野1986	釈迦堂遺跡博	
		笛吹市(旧一宮町)釈迦堂遺跡群群域北C地区	IVD		長沢1987	釈迦堂遺跡博	

		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区2	IV C	長沢1987	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区3	III D	中間	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区4	IV C	藤坂Ⅱ式	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区5	IV C	藤坂Ⅱ式	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区6	IV D	長沢1987	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区7	IV C	畑1983	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区8	IV A	長沢1987	釈迦堂道路博	
		笛吹市 (旧一宮町) 釈迦堂道路群野呂原地区9	III A	五領ヶ台式	釈迦堂道路博	
19	追62	笛吹市 (旧御坂町) 桂野道跡1	IV D	望月他1999	笛吹市教委	
	追62	笛吹市 (旧御坂町) 桂野道跡2	DⅡC	望月他1999	笛吹市教委	
	追62	笛吹市 (旧御坂町) 桂野道跡3	IV C	望月他2004	笛吹市教委	
	追62	笛吹市 (旧御坂町) 桂野道跡4	III A	望月他2004	笛吹市教委	
	追62	笛吹市 (旧御坂町) 桂野道跡5	III D	望月他2004	笛吹市教委	
20	162	笛吹市 (旧御坂町) 上黒駒道跡	IV C	谷口1969	笛吹市教委	
21	163	笛吹市 (旧境川村) 一の沢内道跡1	IV C	藤坂Ⅱ式	山梨県立考古博	
	163	笛吹市 (旧境川村) 一の沢西道跡2	IV C	藤坂Ⅱ式	山梨県立考古博	
22	追132	笛吹市 (旧境川村) 西原道跡1	IV C	野崎2002	笛吹市教委	
		笛吹市 (旧境川村) 西原道跡2	IV C	藤内式	笛吹市教委	
		笛吹市 (旧境川村) 西原道跡3	DⅡC	中間	笛吹市教委	
23	追133	笛吹市 (旧境川村) 金山道跡1	III C	新道式	笛吹市教委	
		笛吹市 (旧境川村) 金山道跡2	III C	藤内式	笛吹市教委	
24	164	笛吹市旧境川村方面	IV D	本報告	山守仁太郎氏	
25	167	甲府市 (旧中道町) 上ノ平道跡1	IV D	中山1987	山梨県立考古博	
III	41	甲府市 (旧中道町) 上ノ平道跡2	III A	五領ヶ台式	山梨県立考古博	
	41	甲府市 (旧中道町) 上ノ平道跡3	IV D	井戸尻式	本報告	
26	165	甲府市 (旧中道町) 村上道跡	IV C	長沢・中山1986	山梨県立考古博	
27	166	甲府市 (旧中道町) 上ノ原道跡	IV D	中道町1972	青山学院大	
28	追63	甲府市 (旧中道町) 後呂道跡1	IV C	曾利Ⅰ式	本報告	
	追63	甲府市 (旧中道町) 後呂道跡2	IV A	井戸尻式	未報告	
	追63	甲府市 (旧中道町) 後呂道跡3	IV C	井戸尻式	未報告	
29	追134	中央市 (旧豊富村) 駒平道跡1	II A	中瀬初原	中央市教委	
		中央市 (旧豊富村) 駒平道跡2	III A	中瀬初原	中央市教委	
IV	30	168	甲府市上石門道跡	IV D	藤坂Ⅱ式	上川名1977
31	169	甲斐市 (旧双葉町) 旭崎道跡	IV D	中村1979	不明	
32	170	韮崎市宮久保飯米場道跡1	IV D	中村1979	三枝善衛氏	
	170	韮崎市宮久保飯米場道跡2	IV D	中村1979	不明	
	170	韮崎市宮久保飯米場道跡3	V	中村1979	不明	
	171	韮崎市宮久保飯米場道跡4	DⅡC	榮井1910	東京国立博	
33	172	韮崎市坂井道跡1	IV C	藤坂Ⅱ式	坂井考古館	
	172	韮崎市坂井道跡2	DⅡC	藤坂Ⅱ式	坂井考古館	
	172	韮崎市坂井道跡3	DⅡD	中間前平	坂井考古館	
	172	韮崎市坂井道跡4	IV C	藤坂Ⅱ式	坂井考古館	
34	173	韮崎市天神前道跡	IV C	藤坂Ⅰ式	坂井考古館	
35	174	韮崎市宿尾道跡	IV C	藤坂Ⅱ式	山梨県立考古博	
36	追141	韮崎市石之坪道跡1	DⅡA	藤原他2000	韮崎市教委	
		韮崎市石之坪道跡2	I A	須式	岡岡他2001	
		韮崎市石之坪道跡3	I A	曾利式	岡岡他2001	
		韮崎市石之坪道跡4	III A	五領ヶ台式	岡岡他2001	
		韮崎市石之坪道跡5	IV A	新道式	岡岡他2001	
		韮崎市石之坪道跡6	IV C	井戸尻式	岡岡他2001	
		韮崎市石之坪道跡7	IV D	井戸尻式	岡岡他2001	
37	追143	北杜市 (旧武川村) 東原B道跡	III C	新道式	未報告	
38	追144	北杜市 (旧武川村) 向原道跡1	IV B	井戸尻式	未報告	
		北杜市 (旧武川村) 向原道跡2	IV C	中間	未報告	
		北杜市 (旧武川村) 向原道跡3	IV D	井戸尻式	未報告	
		北杜市 (旧武川村) 向原道跡4	IV C	井戸尻式	未報告	
39	追142	北杜市 (旧武川村) 実原A道跡1	II A	五領ヶ台式	未報告	

		北杜市 (旧武川村) 実原A遺跡2	ⅢC	新道式	本報告	北杜市埋文
	40	175 北杜市 (旧明野村) 上手遺跡		V	中村1970	不明
	41	追65 北杜市 (旧明野村) 平林遺跡		ⅣC	佐野1997	北杜市埋文
	42	追135 北杜市 (旧明野村) 薄訪原遺跡		DⅡA	新道式	北杜市埋文
	43	北杜市 (旧須玉町) 上ノ原遺跡		ⅢC	鎌名寺Ⅱ	北杜市埋文
	44	176 北杜市 (旧須玉町) 下津金遺跡		ⅣC	勝坂Ⅱ式	不明
	45	177 北杜市 (旧須玉町) 御所前遺跡1		ⅣC	勝坂Ⅲ式	北杜市埋文
		177 北杜市 (旧須玉町) 御所前遺跡2		ⅡA	中期末	北杜市埋文
	46	追136 北杜市 (旧高根町) 下原遺跡		ⅣC	井戸尻式	北杜市埋文
	47	178 北杜市 (旧高根町) 安部玉橋森遺跡		ⅣC	中期	不明
	追66	北杜市 (旧高根町) 当町遺跡1		ⅡA	竊沢式	北杜市埋文
	追66	北杜市 (旧高根町) 当町遺跡2		ⅡA	竊沢式	北杜市埋文
	追66	北杜市 (旧高根町) 当町遺跡3		ⅡA	竊沢式	北杜市埋文
	179	北杜市 (旧高根町) 当町遺跡4		ⅣD	勝坂Ⅰ式	不明
	49	追67 北杜市 (旧高根町) 海道前C遺跡1		ⅣC	井戸尻式	未報告
	追67	北杜市 (旧高根町) 海道前C遺跡2		ⅣC	井戸尻式	未報告
	50	追68 北杜市 (旧高根町) 宮の前遺跡1		ⅡA	新道式	未報告
	51	追68 北杜市 (旧高根町) 西ノ原遺跡		ⅣC	井戸尻式	未報告
	52	追68 北杜市 (旧高根町) 新井遺跡		ⅣC	井戸尻式	未報告
	53	追70 北杜市 (旧大泉村) 吉林Ⅳ遺跡		ⅣC	井戸尻Ⅰ式	未報告
	54	追71 北杜市 (旧大泉村) 甲ヶ原遺跡1		ⅡA	新道式	山本他1996
	追71	北杜市 (旧大泉村) 甲ヶ原遺跡2		ⅣD	井戸尻式	山本他1996
	追71	北杜市 (旧大泉村) 甲ヶ原遺跡3		ⅡC	中期前半	山梨県埋文
	追71	北杜市 (旧大泉村) 甲ヶ原遺跡4		ⅢB	竊沢式	山梨考古博2004
	追71	北杜市 (旧大泉村) 甲ヶ原遺跡5		ⅣA	井戸尻式	山梨考古博2004
	55	追71 北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡1		DⅢC	竊沢式	伊藤1996
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡2		ⅡA	新道式	伊藤1996
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡3		ⅡA	竊沢式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡4		ⅢC	竊沢式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡5		ⅣC	竊沢式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡6		ⅢC	竊沢式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡7		ⅣC	竊沢式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡8		DⅢC	新道式	未報告
	追72	北杜市 (旧大泉村) 寺所第2遺跡9		ⅣC	井戸尻式	未報告
	56	追137 北杜市 (旧長坂町) 原町農高前遺跡1		ⅣC	新道式	未報告
		北杜市 (旧長坂町) 原町農高前遺跡2		ⅣC	井戸尻Ⅰ～Ⅱ式	未報告
		北杜市 (旧長坂町) 原町農高前遺跡3		ⅡA	新道式	未報告
	57	追69 北杜市 (旧長坂町) 酒香場遺跡1		ⅣC	中期前半	野代他1997
	追69	北杜市 (旧長坂町) 酒香場遺跡2		ⅣD	井戸尻式	野代他1997
	追69	北杜市 (旧長坂町) 酒香場遺跡3		ⅣD	井戸尻式	野代他1997
	追69	北杜市 (旧長坂町) 酒香場遺跡4		ⅠA	井戸尻式	野代他1997
	追69	北杜市 (旧長坂町) 酒香場遺跡5		ⅢA	新道式	小宮山1998
	58	181 北杜市 (旧小淵沢町) 宮久保遺跡		ⅣC	勝内Ⅱ式	勝内1968
	59	182 北杜市 (旧小淵沢町) 高野岡平遺跡		ⅣC	中期	結信1930
	60	183 北杜市 (旧小淵沢町) 岩久保遺跡		ⅣD	武藤1962	不明
	61	184 北杜市 旧小淵沢町内		V	中村1970	不明
	62	追138 北杜市 (旧白州町) 七小川遺跡群		ⅣC	新道～勝内式	未報告
	63	追73 北杜市 (旧白州町) 鎌木遺跡		ⅡA	十三善提式	杉本1997
	64	185 北杜市 (旧白州町) 風来遺跡		ⅣC	勝坂Ⅱ式	志村1965
	65	追139 南アルプス市 (旧龍形町) 北浦C遺跡1		ⅣC	井戸尻式	未報告
		南アルプス市 (旧龍形町) 北浦C遺跡2		ⅣC	井戸尻式	未報告
	66	追140 南アルプス市 (旧龍形町) 長田C遺跡		ⅡA	五箇ヶ台式	山下他2000
	67	追64 南アルプス市 (旧龍形町) 鉾物澤屋遺跡		DⅢC	勝内Ⅰ式	清水1998
	68	186 南巨摩郡 田代町 城白遺跡		ⅣD	井戸尻式	山本1971
	69	追145 南巨摩郡 南都町 天神堂遺跡		ⅡA	井戸尻式	團原2004
	70	187 黒下		DⅣC	勝坂式	未報告

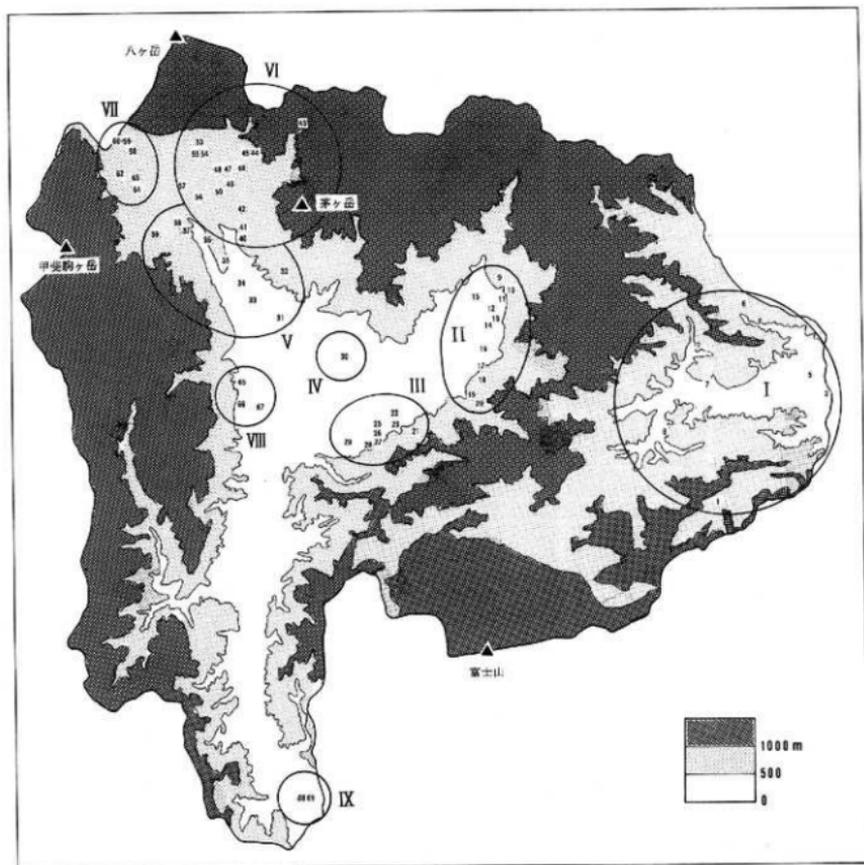


図2 山梨県下における人面・土偶裝飾付深鉢形土器出土遺跡と群別

化したものを示している。ただしⅠはⅣに伴って出現することが、編年上明らかである。典型的な例は、北杜市須玉町津金御所前遺跡出土土器であるが、突出した人面は他のタイプと同様に女神であるのに対し、Ⅰはその子供神とみることができる。

次に人面の向きは、Aは外、Cは内を向いているが、Bは内外両面に付いている。したがってⅡは、ⅡA類しかみられず、次いでⅢA類になって、ⅢC・ⅢB類などのパリエティーが生まれてくるのである。

3 数量・分布と編年

人面・土偶裝飾付土器の各タイプと群別との関係は、表

3に示すとおりである。

これを編年的にみれば、まず前期末の十三菩提式期にⅡA類が出現し、中期初頭の五領ケ台式、磐沢式になるとⅡA類が急増し、ⅢA類も出現発達する。そしてこれに次ぐ中期前半の勝坂・藤内・井戸尻式期は、Ⅳ類の最盛期である。

ⅡA類が前期末に出現したのは、Ⅵ群の北杜市白州町維木遺跡であるが、中期初頭になるとⅠ・Ⅳ群を除く全域に拡散する。しかしⅢ類になるとⅠ群にみられるようになる一方、Ⅵ・Ⅶ群にはみられなくなる。またⅡ・Ⅵ群の数量が増加する。そしてⅣ類は全域にみられるようになるが、Ⅱ・Ⅵ群の優勢は継承され、Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ群がこれに次いで



写真1 人面・土偶裝飾付深鉢形土器の諸形態
 1：ⅠA類（酒香場遺跡第4例），2：ⅡA類（寺所第2遺跡第1例）
 3：ⅢA類（酒香場遺跡第5例），4：ⅣC類（海道前C遺跡第1例）

表3 群別人面・土偶裝飾付深鉢形土器数量表

群	遺跡数	資料数	分類別数量								
			I	II	III	IV	V	DI	DII	DIII	DIV
I	8	10			2	7	1				
II	12	58		13	7	35			1	1	1
III	9	18		1	4	12			1		
IV	1	1				1					
V	10	26	2	1	3	14	1			1	
VI	18	41	1	10	5	21	1		1	2	3
VII	7	7		1		5	1				
VIII	3	4		1		2				1	
IX	2	2		1		1					
集内	1	1									1
計	71	168	3	28	21	98	4	0	3	5	5

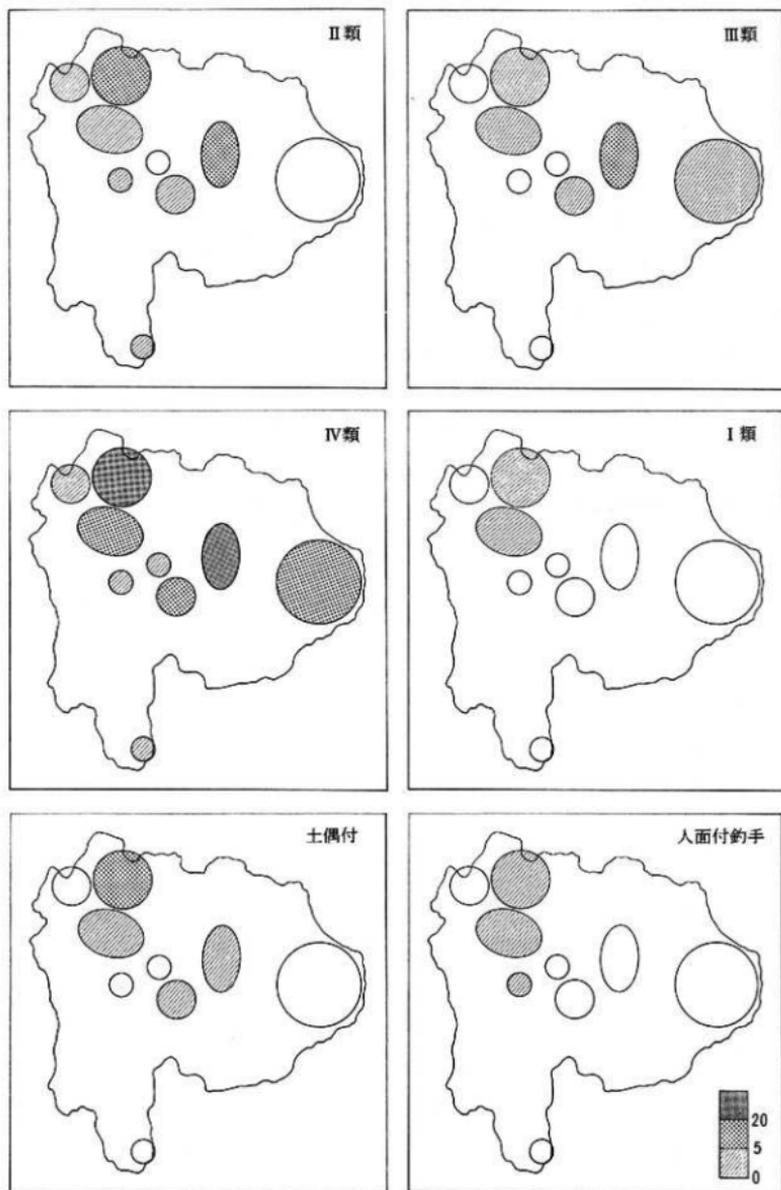


図4 各形態の群別分布図

いる。そうした傾向のなかで、IV群にもはじめてIV類が分布するようになる。またI類も、V・VI群にみられるようになる(図3)。

すなわち甲府盆地から八ヶ岳東南麓にかけての、II~III群が重要地域であることが明らかである。上偶付土器もこの地域内に分布している。また人面裝飾付釣手土器も、このなかのV・VI群とVII群とにみられ(渡辺 1995)、この地域の重要性がさらにはっきりと示されている。

4 おわりに

そもそも人面・上偶付土器の重要性は、「死と再生」の観念の出現発達と、日本人の精神世界の源流を示唆するものと理解されるからである(渡辺2004他)。このことをさらに明確にするために、形態観察・出土状態の検討などをさらに詳しく行なわなければならない。しかも山梨県はその発達を中心地域であるから、他地域よりも研究について大きな役割を果たしていく必要がある。

そして本稿において重要地域が限定されてきたが、その隣接地域として長野県の南信地域も同様に重要であり、今後両地域をあわせて検討を進める必要がある。

そしてなによりも、「死と再生」観念の出現発達を促した生業の基盤を、真摯に追求して必要がある。当然森森米一氏の中期農耕論を避けては通れない。この問題は土器偏重研究の陰に隠れ、一部の研究者を除きほとんど無視に近い状況である。全体的に縄文研究の改善を進めていきたいものである。

謝辞

本稿をまとめるに際し、多くの方々のご教示と御協力を仰いだ。とりわけ筆者たちの目的に沿った撮影を行なうために、諸先生・諸兄姉、および諸機関の暖かいご配慮を仰いだ。末尾ながら銘記して、深謝の意を表する次第である(五十音順、敬称略)

秋山圭子・岡宮正樹・新井正樹・伊藤公明・出月洋文・伊野和紀・関間俊明・岡野秀典・岡部昌隆・奥山和久・小野正文・小林和夫・坂口広太・佐野隆・志村富二・木本健・杉本 充・瀬田正明・沢沢 昇・田代 季・谷口一夫・田原良信・長沢宏昌・中山誠二・奈良泰史・新津健・新津多恵・野崎 進・野代幸和・野木孝明・秦野昌明・林部 光・宮脇実美・村松佳幸・村山美春・宍伏徹・日黒明彦・望月和幸・山路泰之助・山下孝司・山寺仁太郎・山本寿々雄・吉田泰幸・吉本洋子・和田和哉
旧明野村教育委員会・上野原町遺跡調査会・旧上野原町教育委員会・上野原市教育委員会・旧人泉村教育委員会・旧馬場町教育委員会・旧境川村教育委員会・山形町教育委員会・釈迦堂遺跡博物館・旧須玉町教育委員会・旧高根町教育委員会・都留市教育委員会・旧豊富村教育委員会・旧長坂町郷土資料館・旧中道町教育委員会・南部町教育委員会・並崎市教育委員会・旧白州町教育委員会・笛吹市教育委員会・北杜市教育委員会・旧御坂町教育委員会・南アル

プス市教育委員会・旧武川村教育委員会・山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・山梨市教育委員会

引用文献目録(五十音順)

- 岡宮正樹 1987『西原遺跡・町野遺跡』
石神孝了他 2003『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第205集
伊藤公明 1996『寺所第2遺跡』北巨摩市町村文化財担当学会年報 平成7年度
関間俊明他 2001『石之坪遺跡・西地区』
岡野秀典 1988『駒平遺跡』豊富村埋蔵文化財調査報告書 第7集
奥山和久 1998『大槻II遺跡』山梨県史 資料編1
小野正文 1986『釈迦堂I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第17集
同 1987『釈迦堂II』同第21集
上川名昭 1971『中斐北原・柳田遺跡の研究』
同 1977『上石田遺跡』
橋原功 2004『上偶付土器の発見・天神堂遺跡(南部町)の調査成果』帝京大学山梨文化財研究所報 第48集
同 他 2000『石之坪遺跡・東地区』
小西直樹 1993『上野原小学校遺跡』上野原町埋蔵文化財調査報告書 第6集
小林知生 1954『山梨考古資料』山梨大学文学芸学部研究報告 第5号
小林広和 1978『安道寺遺跡』
小宮山隆 1998『酒谷場遺跡G地区』長坂町埋蔵文化財調査報告書 第11集
佐野 隆 1997『平林遺跡。八ヶ岳考古』平成7年度年報
同 2004『明野町諏訪原遺跡』八ヶ岳考古 平成15年度年報
柴田常憲 1910『人面を付せる石器時代の土器把手』東京人類学雑誌 第26巻296号
清水 博 1988『鐘師塚遺跡』山梨県史 資料編1
志村滝蔵 1965『坂井』
杉本 充 1997『榎木遺跡』
高野玄明他 1996『九鬼II遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第118集
谷口一夫 1959『黒駒発見の中期縄文土器』富士国立博物館研究報告 第2号
同 1967『八ヶ岳東南麓の中期縄文式土器・山梨県北巨摩郡高根町北朝遺跡出土の土器について』甲斐考古 第2号
同 他 1966『宮谷B地区出土の顔面把手』中央自動車道東京・富士吉田線の新設に伴う発掘調査報告書
鳥居龍蔵 1924『諏訪史』第1巻
長沢宏昌 1987『釈迦堂III』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第22集

- 同・中山誠二 1986「一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜亥井場遺跡」〔山梨県埋蔵文化財センター調査報告〕第16集
- 中道町教育委員会 1972「甲斐の国中道町の文化財」
- 中村日出男 1970「顔面把手1」〔郵政考古〕第1号
- 同 1979「顔面把手5」同第5号
- 同・奥 孝行 1974「山梨県道志村神地出土の顔面把手」〔考古学ジャーナル〕第92号
- 中山誠二 1987「上の平遺跡」
- 同・丸山哲他 1994「宿尻遺跡」〔山梨県埋蔵文化財センター調査報告書〕第81集
- 仁科義男 1935「山梨県出土の石器時代上個」〔考古学雑誌〕第23巻第20号
- 野崎 進 2002「西原遺跡・柳原遺跡（2次）」〔境川村埋蔵文化財調査報告書〕第17集
- 野代幸和他 1997「酒呑場遺跡（第1・2次遺構編）」〔山梨県埋蔵文化財センター調査報告書〕第135集
- 野中完一 1904「巻木図の説明」〔東京人類学雑誌〕第19巻第215号
- 畑 大介 1983「釈迦堂遺跡周辺分布調査報告書」
- 藤森栄一 1968「原始時代」〔下諏訪町史〕上巻
- 船窪 久 1930「山梨県北戸摩郡発見の土偶」〔史蹟名勝天然記念物〕第5集第8号
- 武藤 澄 1962「山梨県小淵沢岩久保発見の土器」〔信濃〕第14巻第3号
- 村石真澄 1994「上の平遺跡第6次調査・東山北遺跡第4次調査・鏡子塚古墳南東部試掘」〔山梨県埋蔵文化財センター調査報告〕第94集
- 望月和幸他 1999「速報・縄文のムラ」
- 同他 2004「桂野遺跡」旧御坂町教育委員会
- 山路恭之助他 1987「津金御所前遺跡」〔須玉町埋蔵文化財報告〕第4集
- 山下大輔他 2001「長田口遺跡」〔櫛形町文化財調査報告〕第18集
- 山梨県立考古博物館 2004「縄文の女神」
- 山本寿々雄 1971「富沢町の先史文化」
- 山本茂樹他 1996「甲ツ原遺跡Ⅱ」〔山梨県埋蔵文化財センター調査報告書〕第114集
- 吉本洋子・渡辺 誠 1994「人面・土偶裝飾付土器の基礎的研究」〔日本考古学〕第1号
- 同・同 1999「岡迫補」〔日本考古学〕第8号
- 同・同 2005「岡迫補2」〔日本考古学〕第19号
- 渡辺 誠 1995「人面裝飾付の釣手土器」〔比較神話学の展望〕
- 同 1998「人面裝飾付注口土器と関連する土器群について」〔七社宮 福島県浪江町教育委員会〕
- 同 2004「縄文の女神—人面・土偶裝飾付土器にみる縄文人の精神世界—」〔縄文の女神〕山梨県立考古博物館

追補

表2中に次の漏れあり。ただし、表1・3には変更なし。新番号55と56の間に、旧番号180の北杜市（旧大泉村）金生遺跡の1（ⅢB、曾谷式）、2（ⅢC、曾谷～安行Ⅰ式）がはいる。

環磔方形配石遺構の復元について

—塩瀬下原遺跡敷石住居から—

木 木 健

はじめに

- 1 塩瀬下原遺跡の環磔方形配石遺構
- 2 環磔方形配石遺構の観察

- 3 周磔帯の復元
- 4 まとめ

はじめに

本論は、山梨県大月市梁川町塩瀬955番地他にある、塩瀬下原遺跡（山梨県教育委員会 2001）から発見された大型の敷石住居跡（1号敷石住居）に伴うとされる「環磔方形配石遺構」について、その性格を探るとともに、鈴木保彦氏（鈴木保彦 1976）や山本暉久氏（山本暉久 1985）、金井安子氏（金井安子 1984）らが「環磔方形配石遺構」「周磔を有する住居址」に与えた旧来の意味付けを、再考しようとするものである。

最初に塩瀬下原遺跡の報告内容を示して、報告者の示した判断の軌跡を述べ、次に、塩瀬下原遺跡の敷石住居の上層の配石と環磔方形配石遺構、その下の敷石住居の関係を、他の報告事例の検討をもとに再確認しておきたい。これは、先の中層的な遺構がそれぞれに時間差を持った遺構なのか、同一時期に存在し同時に廃棄されたものかを確認するためである。

また、塩瀬下原遺跡の敷石住居は縄文時代後期・埴之内式期の年代が与えられている。この年代は金井安子氏が「縄文時代の周磔を有する住居址について」（金井 1984）で採りあげた中期終末から後期初頭の遺構群と、鈴木・山本両氏が採りあげた後期加曽利B期の接点に位置するものであり、金井氏が予想したとおり「周磔を有する住居址」と「環磔方形配石遺構」は時間に添った一連の遺構の可能性がある。

なお、鈴木保彦氏や山本暉久氏による「環磔方形配石遺構」に対する観察・認識・評価が、両氏の論文発表以降、20～30年間も「環磔方形配石遺構」の観察に大きな影響を与えている訳で、新たに発見された同様の遺構については、両氏の論をほぼなぞるような観察・評価が安易に行われている危険性を危惧し、ここでは、旧来の鈴木、山本両氏と金井氏の見解を比較検討し、新たに上層配石・環磔方形配石遺構・（敷石）住居を立体的な角度から検討することで、使用当時の遺構の復元を示したい。この復元を、祭祀に伴った遺構と考えられてきた「環磔方形配石遺構」の見方を変えるべき提案としたい。

1 塩瀬下原遺跡の環磔方形配石遺構

- 1) 塩瀬遺跡1号敷石住居の観察（第1・2図）
報告書では次の様に記されている。

「環磔方形配石遺構について

環磔方形配石遺構は、居住部奥壁側の敷石の間にコの字型に配置された小磔の帯である。ここでは、東・南・西の順に記述していく。まず、環磔方形配石遺構東側は、長さ約2m、幅0.35cm、厚さ0.1m程の帯である。周辺の敷石より約7cm落ち込んでいる。また、上層の礎群との差は20cmほどある。遺物は、石器2点・土器片が出土している。石器は磨石と石棒の破片である。

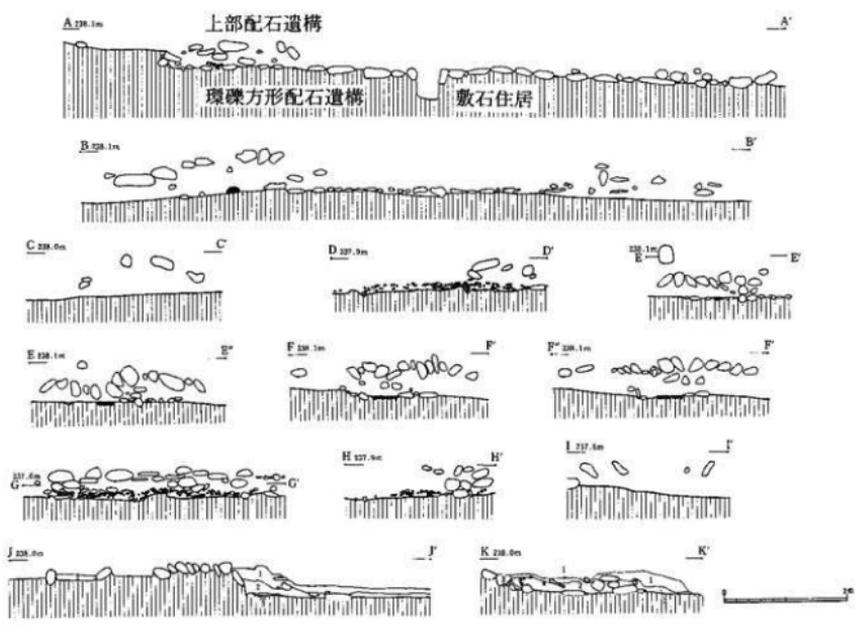
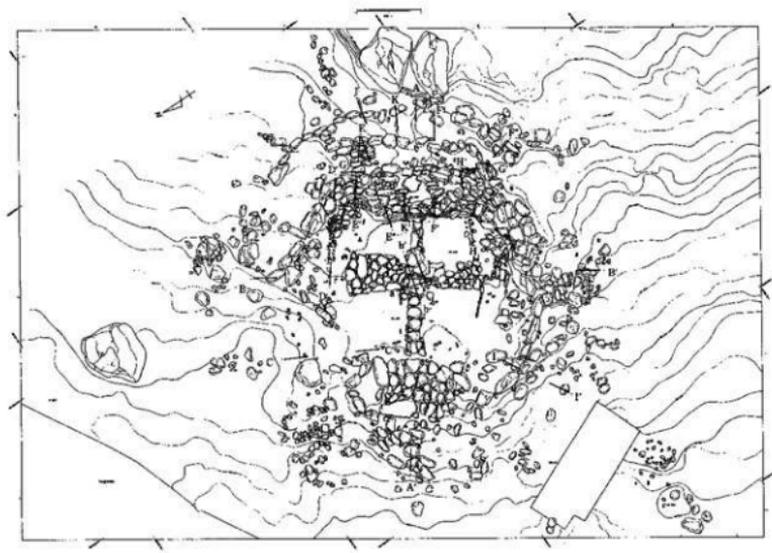
環磔方形配石遺構南側では、長さ約3.7m、幅0.2～0.4m、厚さ0.1m程の帯である。周囲の敷石より約7cm落ち込んでいる。遺物は、石器7点、土器片3点、炭化材1点が出土している。石器は4点が磨石で、中央より西側から磨製石斧の破片が出土している。また、その近くで瑪瑙製の玉が三分の一程度の破片で出土した。小磔をはずしていくと、帯のほぼ真ん中には、敷石が1つ残っていた。この敷石は、居住部分の「I」字型敷石の軸を延長したものと方向を同じにしている。この敷石の周辺には環磔方形配石遺構の小磔よりやや大きめの石で補強され、周囲の敷石と様相が似ている。また、レベルも違和感がない。

環磔方形配石遺構西側では、長さ2.4m、幅0.3～0.5m、厚さ0.1mほどの帯である。遺物は、磨石が2点、黒曜石の破片が1点、土器が2点出土している。磨石は敷き詰められて小石の上に置くように配置され、その下の遺物は、小石と一緒に敷き詰められている。敷石部分が一部環磔方形配石遺構の下に入り込むようになっている。

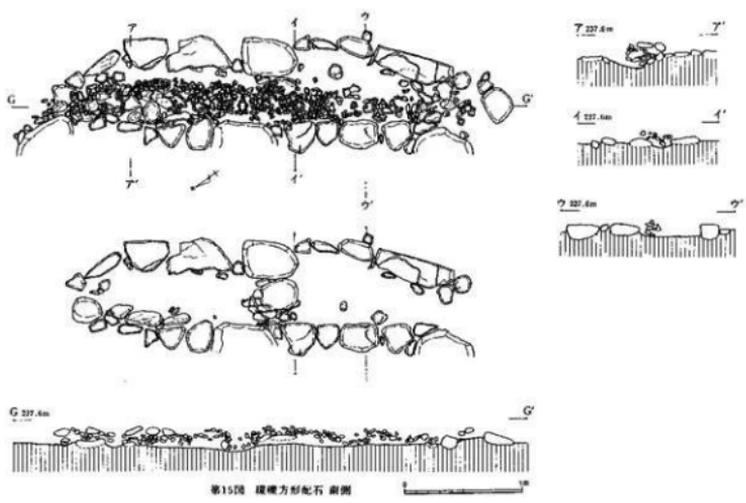
敷石住居の敷石と環磔方形配石遺構の関係について、担当者は次のようにその構築順序を判断しているので、第3図により、これも紹介しておく。（第9図も参照）

まず、敷石住居内の敷石を、次のように3区分した。

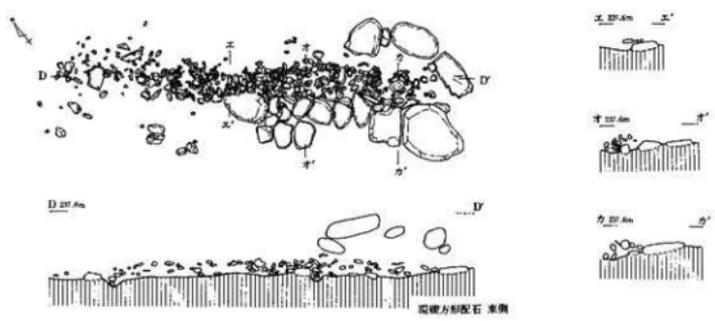
- A 縁石に沿った円形の敷石
- B 環磔方形配石遺構に分離された内側の敷石
- C 「I」字型の敷石



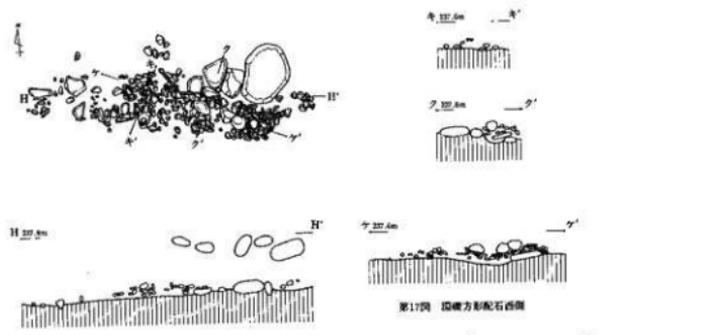
第1圖 塩瀬下原遺跡敷石住居



第15圖 環礁方形配石 縱斷

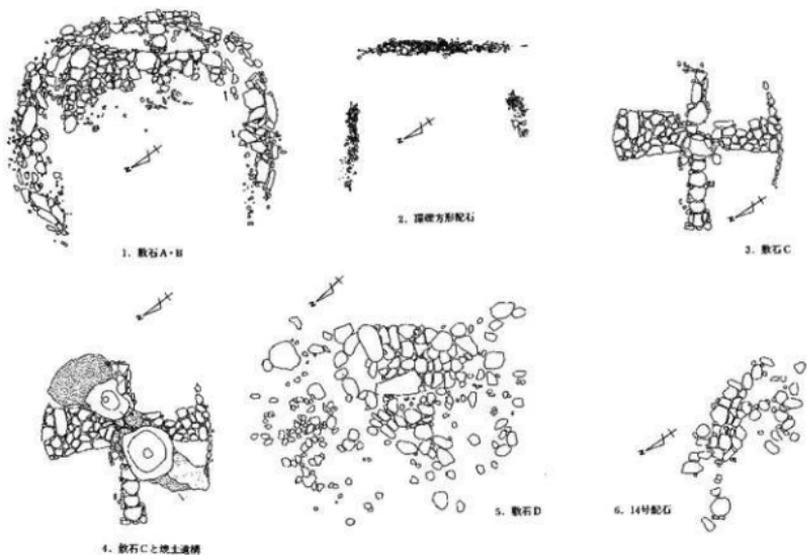


環礁方形配石 縱斷

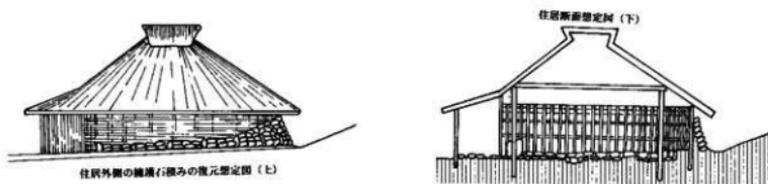


第17圖 環礁方形配石 西側

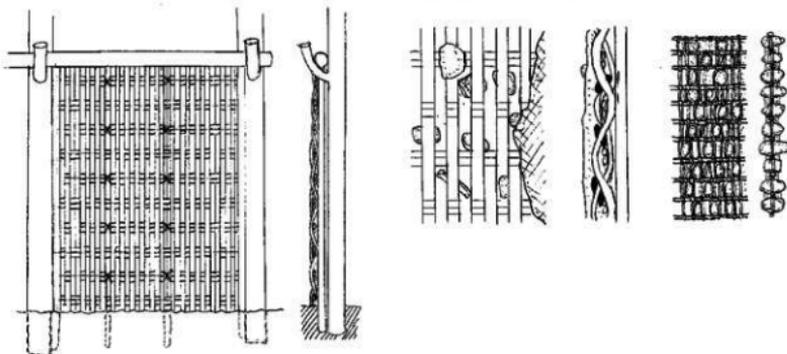
第2圖 塩潮下原遺跡敷石住居 環礁方形配石遺構



第3図 塩瀬下原遺跡 敷石等分解図



第4図 塩瀬下原遺跡敷石住居復元図（末木 2000より）



第8図 環状方形配石遺構の復元

D 柄鉢型住居の柄部分の敷石

つぎに、それぞれの関係を述べている。

- ①敷石Bと敷石Aは、敷石Bの南東辺に位置する大型の敷石と、敷石Aの縁石との距離が等しく、同一企画で作られたと考えられる。
- ②敷石B・敷石Aと敷石Cの十字型敷石は、敷石Bと敷石Aの接点となる敷石と、十字型敷石の中心軸が約50cmずれている。
- ③CとDの主軸はほぼあっているため同一企画で作成されたと考えられる。
- ④従って、A～Dの敷石は同一企画で作られたもの。
- ⑤環状方形配石遺構は、一部敷石に被さるが、敷石Bと敷石Aの間の敷石を剥ぎ取り、その後作られた。

この観察から、「十字の敷石Cと奥壁側の敷石A・Bのどちらが先に作られたかは、今回の検証では明らかにできなかったが、敷石A・Bより環状方形配石遺構が後に作られたことは間違いない。また、これらの敷石を意識しながら、上層の礎群が作られたことも想定される。したがって、この敷石住居跡は短期間のうちに、何度も立て替えもしくは、増築されて、最終段階の環状列石の様な体裁をもったものと考えられる」として、報告では「検証した遺構は、その1つ1つが、期を同じにしないことが想定される。」とした。

こうした、遺構を別々の時間に造られ、使用されたものとするのは、鈴木・山本尚氏の影響が強いものである。

2) 敷石遺構と上層の礎配石の関係

さて、本遺構の上部にある同心円状の配石については、すでに本敷石住居の外壁を構成する石積遺構が、南側の崖線の土砂崩落により住居内部へ倒壊したものと説明したことがある(第4回)(末木 健 2000)。

同様の遺跡としては、かつて神奈川県青根湯1号住居の住居内石積みを参考として示したが、これ以外に塩瀬下原遺跡と類似しているのが、神奈川県愛甲郡清川村宮ヶ瀬の北原(N.9)遺跡J4号敷石住居と同遺跡J1号配石遺構との関係である。この二つの遺構は明らかに同一遺構の上層または駁構造物と、床構造物と考えられるが、報告者はそれぞれ別の遺構と考えたものである(神奈川県立埋蔵文化財センター 1994)。

塩瀬1号敷石住居と類似している点は、

- ① 上部の同心円状配石は地形上の上部に位置する。
- ② 上部配石は敷石住居に覆い被さる様に分布しており、敷石とは間層をもっていること。
- ③ 上部の配石は横口積みにした石が倒壊した状態を呈する。

等の点である。この要素は塩瀬遺跡1号敷石住居で復元した考え方と一致する。

北原遺跡(N.9)では、入口部分の敷石(柄鉢住居の柄部)を意識して、周境帯に貼りつけられた石積み遺構が、柄部に通路を形成しながら住居内側に入り込んでいる様子は、あたかも古墳の前庭部から女室に入る時の石積み構造

と酷似する。通路を意識した入口部の周境帯石積みは、乱雑ではあるが山梨県富士吉田市池之元遺跡1号住居(富士吉田市市史編纂室 1997)などにも見られ、その復元状況は富士吉田市歴史民俗博物館で実見することができる。

なお、住居を取り囲む礎群・周境帯などを含め、このことについては、石坂茂氏(石坂茂 2004)などによっても特殊な住居に伴う住居構造物として一定の考えが示されており、石井寛氏は周境帯の観察から「住居外郭からの視線が意識された施設」とし、特別な住居であることを述べている(石井寛 1996)。

この様に上部の配石が、敷石住居と一体の立体的な構造物であるとすれば、当然、敷石住居と環状方形配石遺構は同一時期の遺構を形成する構造物であることになる。なぜなら、同一時期の「上部配石遺構」と「敷石住居」の構造物に挟まれているのが、今回の問題としている「環状方形配石遺構」だからである。

2 環状方形配石遺構の観察

1) 旧来の観察

塩瀬下原遺跡1号住居の環状方形配石遺構は、報告者が述べているように、敷石Aと敷石Bの間にあり、しかも敷石の無い部分は、敷石面よりも7cmも下に礎が並んでいる。このことは、敷石と環状方形配石遺構を同時のものと考え、敷石を敷くときには初めから環状方形配石遺構の場所にはほとんど敷石を設置しなかったことになる。一部の敷石が礎群の下にあったのは、何か別の理由があるのだろうか。

確かに作業上の前後関係から言えば、敷石の設置が環状方形配石遺構に先行することは明らかである。だが、敷石住居と一体の上部の配石によって覆われている環状方形配石遺構は、二者が一体のものと理解しないと、サンドイッチの上下のパンとハムやサラダを別々に食べるような、不自然な理解が生じるのである。

環状方形配石遺構と敷石住居・穴穴住居は同時存在ではなく、環状方形配石遺構が後から作られた祭祀遺構としたのは、鈴木保彦氏である。また、山本暉久氏は環状方形配石遺構は住居縁側に作って造られたと述べており、その前年に金井女子氏も中期後半から後期初頭の「周境帯を有する住居址」について同様の考えを述べているので、順次これらを紹介しておく。

○鈴木保彦

a 環状方形配石遺構の形態

方形にめぐむ小礎列と遺構の中心に設置される火焚場、およびその一方から外側に伸びる張出部によって構成される。

次の形態に分類される。

A型 火焚き場は石囲いではなく、張出部がピットによるもの

B型 張出部が敷石のもの

B1型 火焚き場が石囲いで、そこから長く続く張出部

が細長い石敷きによるもの。

B2型 火焚き場は石囲いではなく、柄鏡型の張出部が敷石となるもの。

B3型 火焚き場が石囲いで、柄鏡型に張出部も敷石となるもの

b 環状方形配石遺構の復元

・柱孔やピット列から方形の施設で、上屋があった可能性が高い。

・小竈列は屋内の周囲にめぐっており、小竈は床面に高く盛り上げる様に配列していたと思われる。

・火焚き場は良く使用され、これ以外でも火が焚かれていた。

・張出部は敷石住居と共通し、入口となる可能性がある。

c 環状方形配石遺構の性格

・環状方形配石遺構の火焚き場はもちろん内外が焼けて焼けた土が見られる。

・環状方形配石遺構の小竈も焼けている。

・竈は方形に配置されて焼かれたか、焼かれた石を方形に配置したか不明。

・環状方形配石遺構からは石神など特殊な遺物が出土することから、礫帯、火焚き場、張出部は特殊な遺構。

d 環状方形配石遺構を取り囲む川原石による配石列について

それぞれ独立した遺構であるが、両者が同一の目的を持って造られたもので、組石列は明らかに敷グループから十敷グループの組石遺構の集合体であり、個々の組石遺構が意味を持つと同時に、共同社会共通の祭祀の場として、環状方形配石遺構を取り囲むように構築されたもの。

○山本暉久

・環状方形配石遺構は基本的に竪穴式

・張出部を除くと方形プランを呈しており、後期の住居と共通している。(平相台遺跡は隅円方形)

・柱穴が存在するから、上屋構造を想定できる。柱穴の数から数回の直置しが考えられる。

・鈴木の言う火焚き場はかと考えられる。

・張出部に埋煙を伴うことがあり、まれに加曾利B式段階の埋煙もある。

・張出部施設を有するものが多く、この時期の柄鏡形(敷石)住居の張出部と同一である。環状方形配石を持つか持たないかだけの違いである。

・敷石状況は全面敷石を持つ遺構は無い。

・環状方形配石は①方形にプランを囲む様に配石する。②石は単大以下の礫を多量に用いる。③礫は火熱をおび、焼土・炭化物の屑とともに検出されている。④火入れはプラン全体に及んでいる。⑤礫帯は上屋が無くなった後、配石されている。⑥環状方形配石遺構は住居の廃絶に伴う行為

・焼けた獣骨片が環状方形配石遺構やその近辺から出土している。

・築室内での在り方は、環状集落の展開の中に、祭祀・築城・居住といった空間分割があり、環状方形配石遺構もそ

の中でとらえられるべき。

・時期は加曾利B1式期を中心とするが、その初源は中期終末〜後期初頭の柄鏡式敷石住居の中に見られる。

・環状方形配石遺構は「環状方形配石を有する住居址」と呼ぶべきで、一般的な住居が廃絶されるときに、環状方形配石が行われて、火入れがされた特殊な遺構といえる。

・「環状方形配石遺構」の特殊性は「環状方形配石」という行為に求められるべき。

○金井安子

・「周礫を有する住居址」は、関東地方、特に多摩丘陵から武蔵野台地にかけて集中している。また、時期は中期終末から後期中葉におよび、中でも加曾利EIV式および称名寺式期に属するものが多い。

・「周礫を有する住居址」は住居址の壁に沿って環状ないし弧状に礫や土器片、石器などがめぐり、その多くは親指大から拳大程度の小礫によって構成される。

・周礫遺構の出土状況および住居址の柱穴との位置関係は①礫が柱穴内に重なる形で配されるもの、②礫が柱穴間に配されるもの、③礫が壁に沿って柱穴の外側や内側に配されるもの、に分けられる。

・周礫はその住居の存在を意識して礫、土器片や石器を配するという行為がなされた。

・敷石住居の敷石は昇住時に行われ、周礫遺構は廃絶された住居址に対してなされた行為。

・周礫遺構は廃絶された住居址の、居住空間を圍繞することにこそ意味があった。

・「周礫遺構」と「環状方形配石遺構」を比較すると、後者の方がより山岳地帯よりの分布を示す。所属時期も前者が中期後半から後期中葉、後者は加曾利B1・Ⅱ式期に中心がある。しかし、周礫遺構の中には帯状に礫が配される例もあり、焼上の検出や礫に被熱の痕跡がある点は類似。

・環状と方形という形状の違いは両者の主とする時期からみて、住居址のプランに沿って礫が配された結果であり、両者の間に何らかの系統的関連性を考えることができる。

以上3者の考え方を要約して紹介したが、では、鈴木氏と山本氏、金井氏の違いは何であろうか。大きくは3つの点に分かれる。これは次のとおりである。

礫帯や配石、焼上、獣骨などの観察は3者ともに類似しており、おそらく他の研究者による詳細な観察眼によっても、大きく異なることは無いであろう。ただ、鈴木氏が上屋を伴う施設の中におかれた「環状方形配石遺構」と見るのに対して、山本氏や金井氏は住居の解体後「環状方形配石」が、または住居廃絶後「周礫の配置」が行われたとするところ、大きな違いがある。3者が柱穴と周礫の関係を見逃しにしながら、なぜ、このような結果に達したのか、他の観察結果を導き出せなかったのか、次に検討を進めよう。

	鈴木保彦	山本暉久	金井安子
遺構	環状方形配石遺構として構築され、火入れによる祭祀を行った遺構	住居廃絶後に環状方形配石を行い、火入れを行った住居	住居廃絶後に再住域に周障を行った住居
時期	加曾利B期を中心	中期終末からの伝統を受け継ぎ、加曾利B期を中心	中期終末から後期中葉で加曾利E・N式および称名寺式期のものが多い。
性格	上層内部に方形に礎を配した祭祀のための施設で、周囲の配石遺構とともに祭祀行為に伴う	住居を廃棄する時の特殊な祭祀行為	周障遺構には、礎を以てかつての居住空間を囲繞するという機能が附されていた。

2) 環状方形配石遺構・周障遺構の特徴と柱穴との関係 (第5・6図)

環状方形配石遺構・周障遺構の特徴には、鈴木氏や山本氏・金井氏が観察したとおり、遺構内部が焼けており、その礎も焼け、獣骨や土神などの特殊遺物も含まれる等の特徴を持つ。このほか、礎が柱穴を覆うものと柱穴をはずして分布する例があり、礎帯の幅は30~60cm前後で、礎帯の断面は、盛り上げるように配されるという。

鈴木氏は「環状方形配石遺構」と指定される建築物と周障帯の関係を、次の様に推定している。「どのような形態の上屋であったかは不明であるが、環状方形配石遺構が上層のある方形プランの建築物をもっていたものであるとすれば、小隴列は陥内の周囲にめぐっていたものと考えられる。しかも床面は現在焼上りが検出される面や、ピットが確認される面であると推定されるから、小隴は床面に高く盛り上げるようにして配列していたものと思われる」

このような鈴木氏の観察・推論に対して、山本氏は柱穴上に礎が分布することから、廃屋になってから環状方形配石が設置されたと考えていることはすでに述べた。また、金井安子氏は、中期後半から後期初期の「周障を有する住居址」を集成し、柱穴と礎群との関係を①礎が柱穴列に重なる形で配されるもの、②礎が柱穴間に配されるもの、③礎が壁に沿って柱穴の外側や内側に配されるもの、に分類したものの、結論は何故か「廃絶された住居の居住空間を礎で囲繞することに意味があった」としている。

そこで、あらためて環状方形配石遺構や周障を有する住居跡における、礎と柱穴の関係を見てみたい。

鈴木・山本両氏が「柱穴を礎が置う」としている例には、山本氏が「狭間、なす原101号、平台北、東正院1・2号」を挙げているが、鈴木氏は「東正院1・2号環状方形配石遺構」は「四隅部と四辺中央部には大形の深いピット

が規則的に並んでおり、しかもこの部分は小隴の配石からはずれていることから柱穴である可能性が高い」としている。ここでは、平台北遺跡の柄鏡形住居を観察する。

平台北遺跡 (第5地点柄鏡形住居) (第6図1)

礎はいずれも狭間部の小隴で、周障中からは多数の土器と2点の石器が出土している。礎は20~40cmの幅で、床面から2~15cm深い、平柱穴を覆うように住居の奥と左右に胴張の「コ」字に配置されている。報告者の戸田哲也氏(戸田哲也 1984)の観察でも、住居と周障は時間的な差があると報告されている。

しかし、この柄鏡形住居と周障の分布を観察すると、確かに多くの柱穴の上には礎帯が覆っているが、礎にあまり覆われていない柱穴を見ることができる。周障帯と礎の薄い柱穴を結んだ岡を作成したが、環状方形配石遺構は、住居遺構とあまりにも同一企画で造られていることがうかがえる。床面と周障とに若干の間隔が存在するが、報告書での断面では、柱穴縁に接して礎が存在しており、礎の一部は柱穴に流れ込もうとしている様な傾斜がうかがえる。報告書の写真から観察すると、周障の15cmの高低差は周障が土堤状に検出された部分のピークと底部の差ではなからうか。

この様に観察すると、周障と係わりのある柱穴は、柄鏡形住居の建物の一部であり、従って、この環状方形配石遺構は柄鏡形住居と一体のものとして良いであろう。ちなみに、炉の左行で周障帯の内側の床面上には焼上がり、火災を受けている。

次に、金井安子氏が示した「礎が柱穴列に重なる」遺構は、「平台北遺跡柄鏡形住居、平台北原遺跡A6、A7、D4号住居、はけうえ遺跡9号住居、新山遺跡20・32号住居、查塚遺跡3号」などがある。このうち平台北遺跡はすでに述べたので、次に、はけうえ9号住居について観察する。

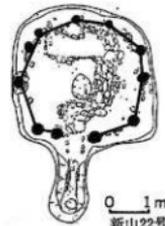
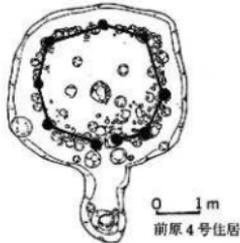
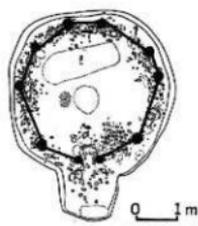
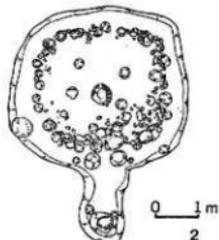
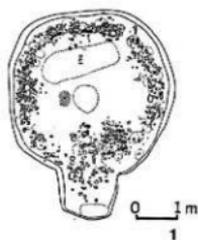
はけうえ9号住居 (中津山紀子 他 1980 「はけうえ」岡野基吉教育考古学研究所センター) (第5図1)

はけうえ9号住居は加曾利E・N式期の柄鏡形住居で、壁の内面に沿って、床面から少し深い状態でも、柱穴に沿って土堤状の周障が検出される。周障は主として川原石で構成され、上部には大形礎、下部には小隴が分布する。中から石皿・石棒・打製石斧破片が出土する。礎は柱穴に沿って分布するようだが、よく観察すると、柱穴に完全に覆っていない箇所があり、これを越すと第5図1(下段)の様になる。おそらく土堤状の礎帯が時間の経過とともに、柱穴上にその分布を広げてしまったのではなからうか。この周障帯はほぼ円形、あるいは隅丸方形に配置されるが、金井も述べているように、これは中期末の特徴であろう。

この他の遺構についても、詳細な図面の検討は経ていないので、決めつけることはできないが、礎量が多いために柱穴上に拡散して分布したと推測したい。

さて、このように考えてくると、環状方形配石遺構や周障を有する遺構は、鈴木氏のいうように上層がある施設と

加曾利 E IV 期

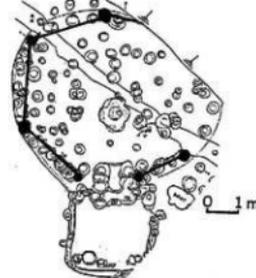
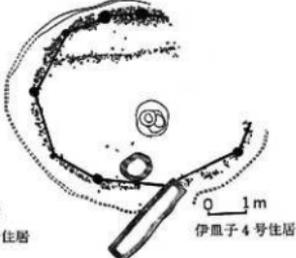
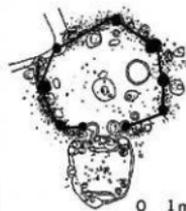
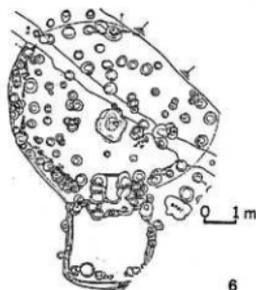
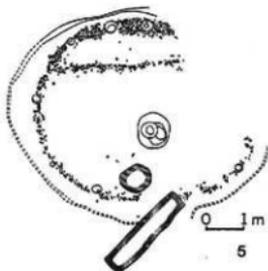
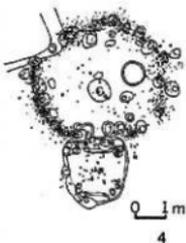


はけうえ9号住居

前原4号住居

新山22号住居

加曾利 E IV 称名寺期

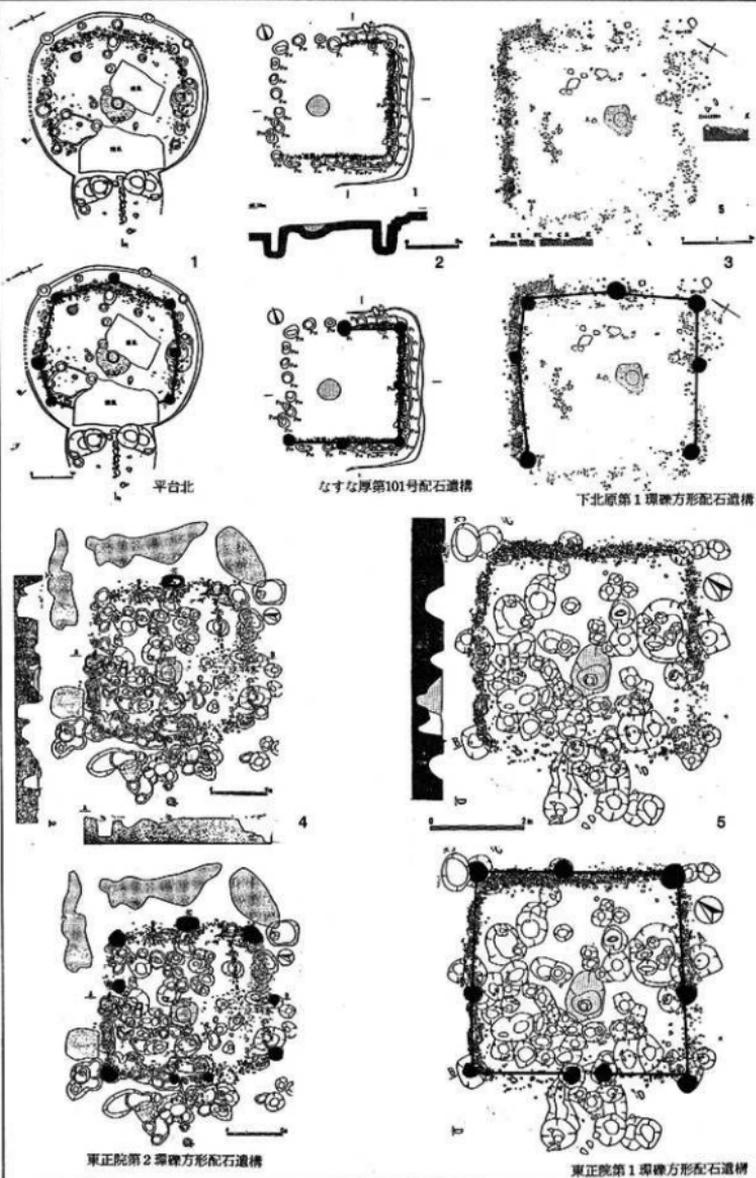


平尾台原A地区7号住居

伊皿子4号住居

三の丸EJ7号住居

第5図 時期別環礫方形配石遺構・周礫住居(1)



第6圖 時期別環状方形配石遺構・周櫓住居(2)

考えるのが妥当である。

3) 柱穴間に周障が記される例

金井氏が挙げている中期後半から後期初頭の例では、神奈川県厚木市峰造跡14号住居、東京都前原造跡4号住居(第5図2)、東京都伊皿子貝塚4号住居(第5図5)、東京都新山造跡22号住居(第5図3)などがある。

また、山本氏の挙げている後期中葉の遺構で、東京都なすな原造跡101号配石(第4図2)、神奈川県東正院造跡第1・2環状方形配列遺構(第6図4・5)などは明らかに、4隅の柱穴と各辺の中央の柱穴が周障と重ならない例である。こうした目で見ると、下北原第1環状方形配列遺構(第6図3)などは、障の無い箇所に柱穴を想定することができるのではなからうか。

なお、第5図では中期終末の加曾利FⅣ式期から後期の加曾利B式期の遺構を图示し並べた。ここで注目すべきは、住居のプランであり、周障のプランもこれに規制されていることが分かる。これは中期終末では8角形を主としていたが、後期では6角形に近い形となり、後期では4角形になっていくことが分かる。塩瀬下原造跡は6角形から4角形への移行形態を見ることができる。

このように、柱穴と周障が同時存在の遺構とすると、周障は床面に高く積まれた上堤状の遺構となり、鈴木保彦氏の想定と一致することになる。しかし、周障遺構には礫と焼土、土器片や石器・炭化物・獣骨などが伴うことは今までに知られている。すべての例が同じような内容物により構成されているわけではないが、横断面は低い上堤状の断面を持つことは共通しており、礫だけではなく上とともにも構成されている。このことは、発掘された状態が縄文時代に遺られ、そのまま埋没したという証拠にはならないのではないかと、思う。むしろ、別な状態であったものが埋没の結果、上堤状の高まりの帯となったのではないかと考えるのが普通ではないか。

また、先に述べたように、環状方形配石遺構と柱穴の関係は、1つの法則に支配されている。つまり、方形の辺の継帯の両端と中央部には、必ず障の存在しない柱穴があることである。その間の小さい柱穴は継帯に覆われているのは、むしろ継帯と同じ構造物を形成した可能性があり、両脇と中央の柱穴はその構造物を支えるための柱穴と考えることができるのではないかと、すなわち、建物の中の立体的な構造物として復元を考えると、環状方形配石遺構は今日に際するのではないかと、思う。ここが鈴木保彦氏のいう環状方形配石遺構の理解と異なる点である。

では、次に周障帯の復元を試みてみたい。

3 周障帯の復元

1) 周障帯の観察

今までの見たように、周障帯は30~60cmの幅を持ち、断面が低い三角またはカマボコ状を呈する。障は1cm×5・6cmの大きさが主となり、川原石が多い。また、周障帯は焼けているものが多く、礫・土器片・石器・土・炭化物な

どで構成されている。中には骨片のあるものもある。

遺構面では焼けているのは環状方形配石遺構とその内側が多く、外側が焼けていないものが多い。周障帯外部が焼けていない例は、八王子市狭間遺跡、横浜市平台北造跡、伊勢原市下谷戸造跡第1環状方形配石遺構、東正院第1環状方形配石遺構環状方形配石遺構(同第2環状方形配石遺構は逆に外側が焼けている)、山梨県大月市塩瀬下原造跡などである。

このことは、環状方形配石遺構が火災の延焼に一定の阻止めをかけた可能性が想定できる。つまり、床面上の施設ではなく堅固な内部の空間を仕切る壁・または仕切り物として存在し、火災または腐食によって落下したものであるという想定が生まれる。これは、塩瀬下原造跡の観察で「環状方形配石遺構の小壁を平面的に4~5回に分けて取り上げておいたが、これらの被熱を分析する機会に恵まれたためにお難い。そして、表面に近い面から標高が下がるに従い、被熱の度合いも減少していくという結果を得た」(報告書より)とあることも重要なヒントとなる。

環状方形配石遺構が最初からカマボコ状に設置されていたなら、火災の際には表面だけが焼けて、内部は焼けないので、下の障があまり焼けておらず、上の障ほど焼けているという上下の差としては観察できない。が、垂直に立てられた構造物が、火災を受けて垂直に崩落したとすれば、上部と下部の被熱差が現れても納得がいくのではなからうか。しかも、環状方形配石遺構はいずれも帯状になっていることから、十壁や板壁ではなく、梁などから垂下される帯状のやや柔軟性を持つ構造物であった可能性が高い。

2) 復元の可能性

先に述べたように、環状方形配石遺構の本来の姿は主柱をつなぐ梁から垂下された構造物であろう。しかも、その構造物は小礫・炭化物のもとになった植物質物質・獣骨・土などともにも構成されていたと考えると、古い日本家屋の壁に類似した薄い壁やカーテン状の簡易な施設が想定できなからうか。

① 壁・仕切り材の想定

日本の伝統的な十壁は、柱の間に竹・木を縄で組んだ木舞を編み、この上に、粘性のある土とワラを水で練り込み発酵させた壁土を投げつけ、木舞となじませてから表面をコテで平に仕上げたものである。

縄文時代の住居にそのような重厚なものが存在したとは思えないが、より簡略化した壁または仕切り材が存在したことは想像できる。その根拠は、縄文時代中期以降は全国各地から植物で編まれたカゴや網、網代、簀(す)、簀子、縹布などが出土しているからである。発掘された網代や網、カゴ類は、植物性土層の採取や加工行程に多川されており、縄文時代のこのような技術は高度なレベルに発達していたと考えても良い。

その例を2, 3採りあげる。

・カゴ状製品

鳥取県鳥取市布勢造跡(財団法人鳥取県教育文化財団

1981) からは2点のカゴが出土しており、このカゴについて渡辺誠、植松なおみ氏の報告がある(渡辺誠他 1981)。この遺跡のカゴは、縄文時代後期に属するもので、第7図1は、まとまってお出土したものを広げて計測されており、その大きさは「横幅36.8cm、縦幅16.7cmで、残存する縁巻きの長さは約47cm、もちり編みは7段階確認されている。(中略)材の太さは、細い部分で約1.0cm、太い部分で約2.5cm、平均は1.5～2.0cm程度」と観察され、「各条の間隔は左右両端の各条が倏然と平行して残っている部分で測ると1.5～1.9cmである」という。また、その材質は、嶋倉口三郎氏によって報告書に記載され、芯も巻き材も「ヒノキ」の細割材の鑑定結果がある。なお、この遺跡からはこの他にカゴ1点と編み物1点の破片が出土している。

・簀(す)

篠竹やアシなどで根く編んだムシロ状の編み物で、福井県鳥浜貝塚から10数例の簀の断片が出土している。この断面はスタレ状広帯などと呼ばれ、縦糸間隔を5mm以下に細かく編んだものと、1cmを超えたものがある。(第7図2)

・簀子(すこの)杖製品

第7図3は、いわき市番匠地遺跡(いわき市教育文化事業団 1989・93)で報告されたものを、渡辺誠氏があらためて詳細な報告を行ったもの(渡辺誠 2005)で、B地点より大形の簀子杖製品が出土している。「現存した平面形はヨットの帆形を呈し、長さ約115cm、幅60cmである。上流側には長さ20、長さ130センチの丸太が貫かれ、簀子杖製品の両側には細い丸太が貫かれ、コの字状を呈している。また、これを補強して、裏面に径2cmほどの棒材を置き、数カ所で草材と棒材を組状の補物で結んでいる。材はヨシと見られ、密なタテ方向にたいしヨコは約10cm間隔で網代編されている」状態でも出土した。

同様の例が栃木県鹿沼市神中前遺跡(鹿沼市教育委員会 2003)の水さらし場から出土している(第7図4)。これは、約2m四方の丸太半割材と板材で囲った施設の中央にある、一辺130cm深さ10cmの彫り込みの底部に、敷かれていた「網代」で、東西80cm、南北100cmの範囲で発見されている。

このほか網や編布などがあるが、これらも縄文時代の技術の高さを知ることができる。なお、発見された遺物の状態だけが用途を示しているのではなく、このような技術によれば住居の様々な施設を造ることができるという証拠にもなる。特に、番匠地遺跡の簀子は十分に住宅の仕切りや簡易な壁として使用することは可能である。

② 壁・間仕切りの構造

以上、見てきたように、縄文時代中期から後期にかけてカゴや簀、簀子杖の製品や施設が作られていた可能性が明らかになったといつて良い。この様な技術は前期からも発達していたものと思われるが、ここで問題としている後期の住居内部の間仕切りや壁に利用されていたかどうかは、大胆に推論を述べるしかない。

第5・6図でも観察したように、仕切り施設は方形住居の場合は四隅に柱穴があり、各辺の中央にやはり柱穴があることから、各辺に仕切りボードが2枚ずつ設置されたと考えられる。そのパネルは柱と主柱を結ぶ梁を使い、簀子杖の編物または簀、網代、網などをセットし、これを補強するために小梁や土器、獸骨、土などを貼りつけたものと思われる。

第8図はこれを想定復元したものである。柱穴間は枠で補強された網代や簀のパネルが建てられ、このパネルを補強するために石や土器片を網代に挟み込み、さらにこの上に薄く土を塗ったかもしれない。このほか草や小枝を積み、装飾的な効果や呪術的な文様を描いていた可能性もある。塩瀬下原遺跡の環状方形配石遺構を構成する小梁が、1cm～6cmほどの細長い形態をしているのは、簀子やザルなどの隙間に挟み込み易い形状をしたものが選ばれたのであろう。また、こうした礎や土器などは、文様の効果の他に表面に貼る粘土の剥落を防ぐこともあった。

これらのパネルは柄籠形住居の居住中心部を取り囲み、主柱の外側の空間と分けていたのであろう。主柱の外側の空間は、さらに堅気の立ち上がり部分と、周境帯を含む空間に分けられ、住居空間が2重3重の構造になっていたと思われる。この空間がどのような役割を果たしたのか明らかではないが、前述したように平台北遺跡や東正院遺跡などの住居内坑土の分布などからも想定される。

なお、周境帯は必ずしも全体を囲うものではなく、住居内部では一部が囲われていた遺構も多い。一部の遺構と全体を囲う遺構とは、時間的な差があるのか、使用上、または祭祀上の儀式的差によるかは今後の検討課題であろう。

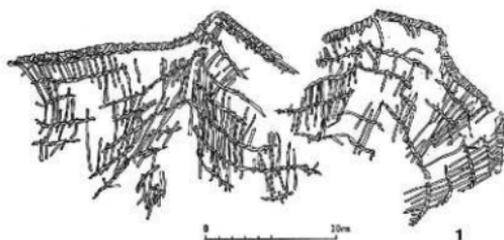
③ 塩瀬下原遺跡の復元

塩瀬下原遺跡の敷石住居には、柱穴が検出されていないが、報告者の笠原みゆき氏が観察したように、住居の奥の南側敷石端は、大形の敷石が約1.7m間隔に3個配されており、その直線に沿った南側に周境帯が存在する。(第9図)

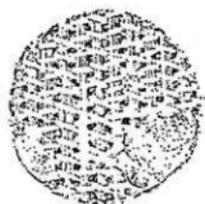
これは、特異な例かもしれないが、礎石建の建物を想定すると、なすな原遺跡101号配石遺構や東正院1・2環状方形配石遺構とさきわめて類似した施設と理解することができよう。ただし、堀之内式期の住居であるから、方形ではなく6角形となる可能性が周境帯の形から考えられるので、両サイドは少し開き、小さな礎石が利用されている様である。

十字形の敷石を囲う環状方形配石遺構は、前述したような居住空間の中心部であり、その周りを壁・仕切り材のパネルにより仕切られたために、火災・放火・廃棄後に礎が落下し、直下のこの場所に形成されたのである。

なお、この時期の礎石立ち建物の存在や類型については、山梨県北杜市須玉町上ノ原遺跡(上ノ原遺跡発掘調査団 1999) C-53号住居跡(堀之内1式期)、同C-83号住居跡(称名寺式期)、C-8号獨立遺構(曾利V-堀之内I式期)などの柱穴の底に礎石が置かれている例があるが、

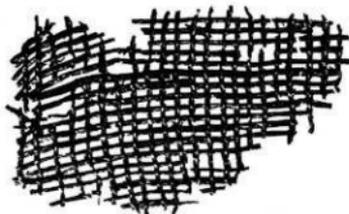


カゴ 鳥取県布勢遺跡 (『布勢遺跡発掘調査報告書』より)



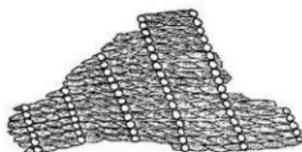
三方編み網代
青森県千歳遺跡出土 (『千歳遺跡 (15)
発掘調査報告書』より)

4



畳 (鳥浜貝塚)

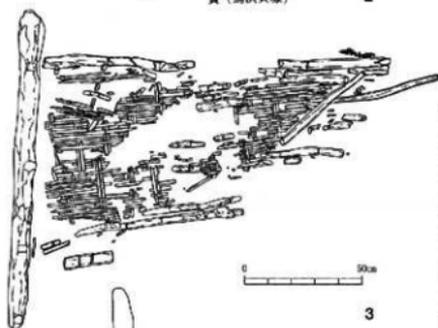
2



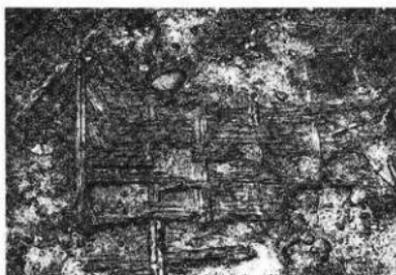
編布 宮城県山王遺跡出土

(『伊東信雄論文』より)

5

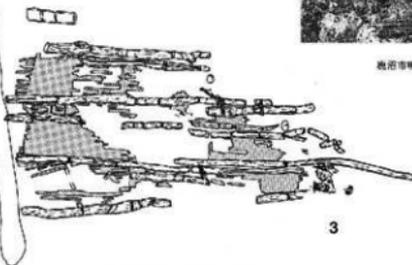


3



池田市明神前遺跡水さらし様遺構 同箕子複製品出土状態

6



3

箕子複製品実測図 (上: 実測, 下: 複製) 香丘地遺跡・久世原館跡

第7図 縄文時代のカゴ、畳子、畳、網代、編布

敷石住居の例としては今後の研究課題である。

3) 壁・仕切り材の民族例

国内の弥生時代以降の遺跡でも、床に敷いた網代などの例は存在するが、ここでは、中国の例を若干紹介したい(浅川滋雄 1994)。

① 成都十二橋遺跡

四川省の成都から発見されたこの遺跡は、殷代早期の遺跡で多数の建築遺構が部材とともに発見されている。特に壁材は洩川氏により次のように説明されている。「直径 6～11センチメートルの丸人を縦横に組み合わせて木舞とし、小さな丸竹と割竹で編んだアンペラ状の壁材をそれに取り付ける。」

② 閩廟山遺跡

揚子江流域の大漢文化(前4500～3000)に属するこの遺跡の家屋址F22遺構からは、次の様な壁が発見されている。

「壁の基礎は、まず溝状の穴を掘り、泥土と赤焼土を混ぜて埋め、搗きかためる。地業内部では、細かい柱穴が多数みつき、束間に倒壊した外壁には竹の圧痕がのこっていた。(中略)壁は、赤焼土・泥土に少量の稻茎・稲初を混ぜている。すなわち、この家屋は、木柱・竹柱と竹の棧によるフレームを持つ「木骨泥埴(もっこついでいしょう)」壁構造に還元できる。」(註1)

③ 元謀大墩子遺跡

雲貴高原の金沙江南岸の盆地に位置するこの遺跡は新石器時代(前1260年±90年)に属し、前掲の演廟山遺跡と類似した壁構造をもつ。

これらの遺跡などを洩川滋雄氏は分類し、分布や比較をしている。まず、氏は住居を0型からⅣ型に分けているが、この中でⅠ型・Ⅱ型の壁構造に興味があるので、これを引用する。

「〔Ⅰ型〕高床式の建物。上部荷重は柱で受け(柱立ち)、壁は荷重と無関係なカーテンウォールで、木舞壁もしくはアンペラ壁とする。Ⅰ型の発掘例はあまり多くない。ただし、年代は深く、揚子江下流域の河姆渡遺跡・羅家角は前5000年頃、馬家浜文化の香草河は前4000年頃、広東の茅崗遺跡は前2700年頃までさかのぼる。」

「〔Ⅱ型〕土間式の建物で、柱立ち。Ⅰ型と同じく壁は荷重支持とは無縁で、木舞壁もしくはアンペラ壁のカーテンウォールとする。揚子江流域から東南地域にかけて分布し、Ⅰ型の大部分とかなり重なりあっている。」

このような事例では、アンペラや木舞に石や土器を扶む例はないが、日本での環礁方形配石遺構を見ると、やはり柱立ち建物で、壁・仕切りは荷重支持とは無関係である。また、完全に一周している例は少なく、部分によっても小礫の量が異なることから、アンペラや木舞に扶み込む場合には特別な約束事があり、文様を描くとか、集団の年間行事を記したカレンダーの役日や、狩場地図、狩獲の成果を記録する等の備忘録として、小礫や焼骨などが機能していたのではなからうか。

4 まとめ

「環礁方形配石遺構」と呼ばれてきた小礫が住居内部にめぐる遺構は、良い間下部の住居と別の遺構で、住居の廃絶に伴って築造されたとか、あるいは廃棄の祭祀行為のために造られた遺構とされ、住居とは別の遺構と見なされてきた。

しかし、鈴木氏や山本氏、金井氏が観察したことを、前述の様に別な角度から検討すると、住居建物と一体の施設で建物内部の構造物であった可能性が指摘できる。この施設は、薄い壁や間仕切り施設であったと思われる、廃絶や火災によって梁から落下し、壁や仕切り材に湿った小礫が、その直下に土層状の剛硬帯を形成したと推定できる。(註2)

関東・中部地方の一部に偏る「環礁方形配石遺構」の例は決して多くはないが、関東地方西部において加曾利ⅡB式期の頃から、類似遺構が見られるようになり、後期中葉の加曾利B式期まで続くもので、このような遺構を住居内部に持つ例は、特異な遺構と考えても良いだろう。しかし、類例の少ないことがただちに祭祀行為の結果として理解しうるかは難しい解釈となろう。

想像を逞くすれば、居住域を囲う間仕切りの木舞やアンペラに挟み込んだ小礫や焼骨などは、家族や集団の行事を記録するためのカレンダーや備忘録か、あるいはもっと大きな叙事詩のパネルであったかもしれない。このような意味があったとすれば、特殊な敷石住居から環礁方形配石遺構が発見されるのも理解ができることである。

本論を著すのに、発掘担当者の笠原みゆき氏は確の実見に協力をいただき、本センター所長・考古博物館長渡辺誠生先生にはカゴや資子状製品の資料紹介をいただいた。また、文献について関根俊明氏にご協力いただいた。未筆であるがここに記して、諸氏に深甚なる謝意を表したい。

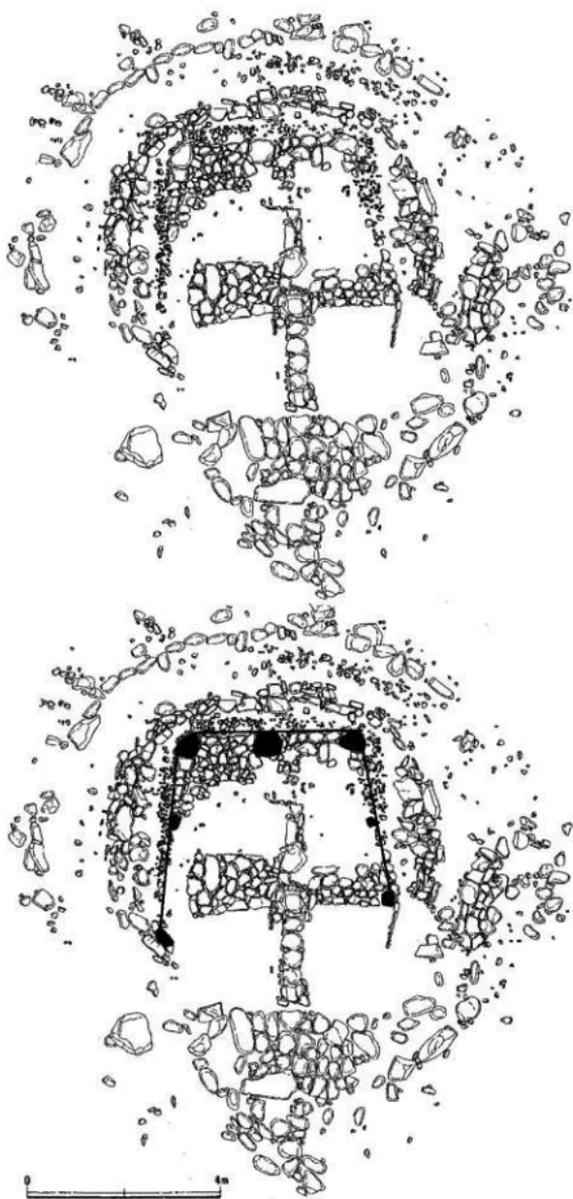
(H17. 10. 1)

註

- 1 塩瀬下原遺跡の環礁方形配石遺構の下が溝状に空んでいた事は、この遺構と共通性があるのではないか。
- 2 壁や仕切り材、カーテンなどの素材として縄も考えられよう。縄は「縄のれん」状の連続したものであり、縄の撚りを戻して、この間に石を扶む方法もあるだろう。1本に扶む石や骨の位置や数が1単位として意味を持ち、数本で1月齢を表すことも可能であり、行事の記録して行われたとすれば、特殊な敷石住居に環礁方形配石遺構が形成された意味もわかる。

参考文献

- 鈴木保彦 1976 「環礁方形配石遺構の研究」『考古学雑誌』62巻1号 日本考古学会
中津山紀子 他 1980 『はけうえ』国際基督教大学考古学研究所センター



第9図 塩瀬下原遺跡敷石住居内の環状方形配石遺構柱配置

- 渡辺誠・植松なおみ 1981 「布勢遺跡出土のカゴについて」『布勢遺跡発掘調査報告書』(財)鳥取県教育文化財団
- (財)鳥取県教育財団 1981 「布勢遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育文化財団長並報告書7
- 金井安子 1984 「縄文時代の周壁を有する住居址について」『青山考古通信』第4号 青山考古学会
- 戸川哲也 他 1984 『横浜市青田町平台北遺跡群発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 山本呷久 1985 「いわゆる「環状方形配石遺構」の性格をめぐって」『神奈川考古』第20号 神奈川考古同人会
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994 「宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ北原(No.9)遺跡(2)北原(No.11)宮ヶ瀬ダムに伴う調査」神奈川県埋蔵文化財センター調査報告21
- 浅川滋雄 1994 『住まいの民族建築学 江南漢族と華南少数民族の住居論』建築資料研究社
- 石井 寛 1996 「縄文時代中期最終末期以降の集落と住居址一横浜市港北ニュータウン地域を例に」『パネルディスカッション「数石住居の謎に迫る」資料集』神奈川県埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団
- 富士吉田市市史編纂室 1997 「池之元遺跡発掘調査研究報告書」
- 上ノ原遺跡発掘調査団 1999 「上ノ原遺跡」(財)山梨文化財研究所
- 山梨県教育委員会 2001 「嵐瀬下原遺跡(第4次調査)」山梨県教育委員会・山梨県土木部
- 末木 健 2000 「縄文時代石積みについて(予察)一山梨県嵐瀬下原遺跡の数石住居復元」『山梨県考古学協会誌』第11号 山梨県考古学協会
- 山梨県教育委員会 2001 「嵐瀬下原遺跡(第4次調査)桂川流域下水道終末処理場建設に伴う発掘調査報告書」
- 鹿沼市教育委員会 2003 『明神前遺跡』鹿沼市文化財報告書14
- 石坂 茂 2004 「関東・中部地方の環状列石一中期から後期への変容と地域的様相を探る」『研究紀要22 一創立25周年記念論文集一』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 誠 2005 「いわき市帯広地遺跡における水さらし場遺構の検討」『研究紀要』13号 財団法人いわき市教育文化事業団

追記

縄文時代の例ではないが、埼玉県川越市上組遺跡の古墳時代後期2号住居内から、編み物用鎌石の興味ある出土状態が報告されている。方形型住居の西側壁近くで、「西壁と南西側柱穴との間に5cm~15cmほどの縦長い礫が並べられていた」とある。この出土状態と遺物の観察から、渡辺誠氏はこの礫に出土状態から「あたかも日置り板を壁と柱(穴)とにくくりつけて作業を行ったような状態」と見ている。おそらく、使用中の編み物用鎌石の紐が腐って切

れたために、直下に落ちたものと考えられよう。これは、環状方形配石遺構の礫と座席状態が類似しているものと考えている。なお、このことについては渡辺誠先生よりご教授を得た。

- * 渡辺誠 1981 「編み物用鎌石としての自然石の研究」名古屋大学文学部研究論集LXXX抜刷
- * 今泉泰之 1974 『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花籠』埼玉県遺跡発掘調査報告3

縄文時代の剥片剥離手法

—酒呑場遺跡出土黒曜石石核の分析から—

保坂康夫

- | | | |
|----------|--------------|-----------|
| 1. はじめに | 3. 石核の観察記載 | 5. まとめと展望 |
| 2. 資料の由来 | 4. 剥片剥離手法の復原 | |

1. はじめに

縄文時代の剥片剥離手法については、田中英司氏(田中1977)、山田昌久氏(山田1985)、大工原尊氏(大工原1996)、町田勝則氏(町田1996)、竹広文明氏(竹広2003)などの研究が提言がある。しかし、中部山岳地域黒曜石の剥片剥離について分析したものは少ない。近年、黒曜石原産地の調査研究が進んでおり、原産地における黒曜石原石の剥片剥離の状況が究明されつつある(長門町教育委員会・鹿山遺跡群調査団2000)。しかし、原石の消費地ともいうべき一般集落での実態は言及されることが少ない。これは、集落遺跡で、剥片剥離工程を復元できるような接合資料に恵まれないのが原因と思われる。黒曜石はそもそも接合資料探索の前提となる母岩分類がむずかしいといわれているが、剥片をトレース台の上に乗べて透過光で観察することで、母岩分類が比較的容易な石材である。こうした方法で縄文時代の剥片の母岩分類や接合を試みたことがあるが(保取1990など)、1母岩の構成点数が2〜3点と少なくなることから、ひとつの原石に対する剥離数が非常に僅少であったのが実態であり、接合資料を得ることそのものが非常に困難な対象と思われた。黒曜石の剥片剥離手法復元は、石核や剥片そのものの分析からあえて類推して行かないと進まないというのが実情であろう。

そこでその手がかりとすべく、酒呑場遺跡の黒曜石石核を中心とする資料を分析したい。酒呑場遺跡は、北杜市長坂町にある縄文時代集落で山梨県埋蔵文化財センターや長坂町教育委員会が1994〜2001年にかけて発掘調査した。縄文時代前期後半の諸磯式期から集落が形成されはじめ、中期末の曾利式期まで継続的に住居の構築がみられる。集落は諸磯式期、五領ヶ台式期—井戸尻式期、曾利式期の3段階で占拠地を変えており、調査された住居跡は総数239軒に達する。報告書はすでに刊行されているが(山梨県教育委員会・山梨県農務部1997ほか)、黒曜石石核については未報告であった。

ここではまず前期後半の諸磯式期の資料を分析するが、諸磯式期は酒呑場集落の起点の時期であり、県内の特に甲

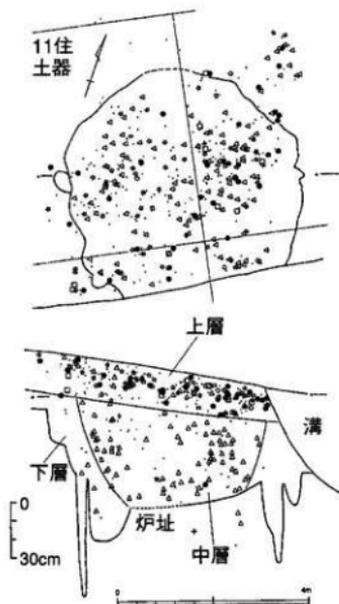
府盆地周辺の縄文時代遺跡の中でも遺跡数の増加する時期である。特に諸磯b2式段階からの住居跡の増加が著しく、各地に集落を形成し、北杜市天神遺跡や笛吹市花鳥山遺跡などのように、大型集落も形成されるようになる。この地域で開化する縄文中期文化形成の起点とも考えられる。そうした位置付けのできる諸磯式期の剥片剥離のありかたをまず観察し、それをスタンダードとして、五領ヶ台式期から曾利式期までの展開についても見通してみたい。

2. 資料の由来

今回黒曜石製石核の実測図を提示するのは、酒呑場遺跡1区11号住居跡出土品である。11号住居跡の大型土器片は諸磯b式期で、浮線文を多用するものが主体を占め、爪形文を多用するものが若干含まれることから、諸磯b2式を中心に諸磯b1式から諸磯b3式までの範囲と思われる。大形土器片の示す時期幅は限定されるものの、縄文時代の住居跡出土遺物は覆土中出土が中心であり、他の時代の遺物と混在することが多いため、特に石器について時期判定が難しい。そこで酒呑場遺跡1区では、以下の方法で遺物の垂直分布を検討することでこの状況を克服した。

発掘調査の段階で、手のひらサイズより大きな遺物を光波測距儀とコンピュータによるトータルステーションで位置を記録したが、その他の小形サイズの遺物についても、5mグリッドを4分割し、2.5m四方の区画を単位として、表面から10cmごとに遺物をまとめて取り上げる方式をとった。黒曜石製品についても、2.5m四方の範囲で10cm単位での出土レベルの確認が可能である。

そこで、まず出土位置を記録した遺物から住居跡覆土内の垂直分布の状況を把握した(第1図)。いずれの住居跡でも3層に区分可能である。当該期とそれ以前の土器片のみを含む中層と、当該期以降の土器片が含まれる上層、遺物がほとんど分布しない床面に接する下層である。11号住居跡の場合、下層は住居跡の壁にそって分布し平面のみでトーナツ状になる。中層は住居跡中央部に床に接しており、中層の最大厚が50cm前後と厚い。上層は床側に傾斜しており、30cm程度の厚さで、曾利式期までの土器片を含む。



遺物分布図の記号凡例

土器

- ・ 諸磯 b・c 式
- ・ 五領ヶ台式
- ・ 角押文のある土器 (猪沢式)
- ・ 三角押文のある土器 (新道式)
- ・ 幅広押文のある土器 (藤内式)
- ・ 半肉彫文のある土器 (井戸尻式)
- ・ 曾利式
- ・ 時期不明

第1図 酒呑場遺跡1区11号住居跡の遺物分布図

曾利式期や井戸尻式期の土器片が各1点ずつ、床面近くにあるが、中期の集落形成時期に開けられたピットなどに落ち込んだものと判断される。こうした土器片の分布状況から、石器などの遺物も、土器片の示す時期のものと理解することができる。諸磯b式期は、それ以前には大規模な集落の形成はみられないため、ほぼ純粋にその時期の遺物群と判断される。この他の時期についても中層の把握が可能であり、中層出土品の比較によって石鏃や打製石斧などの時期変化を捉えることができた(保取2005)。

ただし、その意義付けであるが、この中層遺物群が住居跡の住人の生活期間に係る遺物群であるかは論議があるところであろう。住居跡出土中層出土物群は、括弧上土器のように、住居が廃絶された後の窪地に廃棄されたものであるという解釈が一般的である。下層の無遺物層について住居廃絶後、上層構造を取り去り放置された期間に、住居の壁の崩壊や、風性堆積、降雨による流入などで形成された土層であるとする。しかし、酒呑場集落のように、遺物を多量に含む覆土をもつ住居跡や土坑が密に分布する集落で、他の遺構を壊して構築される住居の覆土に無遺物の層を形成することが可能であったか疑問である。

報告書では、下層の形成と中層の形成とを一体のものとして考えた。それは、屋根を土葺きとするような構造を想定し、廃絶時に柱を抜いて上層をたみ、壁穴の中に落ち込ませる状況と考えた。土葺きは木材や木の枝、草等の屋根材の上に葺かれたものと想定されるが、廃絶後に屋根材がフルイの役目をして上層粒子のみが層根材と床との間に堆積したり、層根材の中に土だけが入り込むことも考えられる。土葺きの土の中には遺物が入り込むのと同時に生活期間の中で廃棄されたものも働き込まれたものと思われる。それが中層となって把握されることになるものと思われる。廃絶後、土葺きの上に遺物が廃棄され、他の時期の遺物と混合する上層を形成したのもと思われる。

こうした考え方からすると、住居跡出土中層出土物群の内、中層のものは当該住居の住人が生活している期間に廃棄した遺物が遺物群の主体となることになる。

ここでは、まず諸磯b式期の11号住居跡の石核を記載し、分類を行う。その後、酒呑場遺跡1区の他の住居跡出土石核についても比較検討を行い、時期変化のありようを検討する。資料としたのは諸磯b式期では2・18・22号住居跡、五領ヶ台式期では6・30号住居跡、猪沢式期では16・19号住居跡、新道式期では12・29・32号住居跡、藤内式期では5・10・20・33号住居跡、井戸尻式期では3・25・38号住居跡、曾利式期では13・21号住居跡である。いずれも、遺物垂直分布を検討し、中層出土物のみを抽出して資料化した。また、剥片や原石についても言及し、縄文時代の剥片剥離手法の実態についても追いたい。

3. 石核の観察記載

第2図1は板状の石核である。剥片剥離作業面であるa面全体は、原石の表面を構成する面の内、最も広い面が選択されている。2枚の剥離面がd面を打面として剥離されている。左側の広い剥離面はa面端部の底面を剥ぎ取り、剥片はウートラパッセとなったと思われる。右側面も折れたような剥離面であるが、この剥離に連続する剥離面である。打面であるd面は、自然面のズリ面である。奥行きのない横長の打面で、長軸方向の辺の左よりを打撃している。a面右端部はd面を打面とする剥離面がcaうじて残存している。この打撃部は打面の右端にある。同一打面から2枚以上の剥片剥離を行ったものと思われる。流紋岩の火砕物

を多く含む不透明黒色の黒曜石である。

第2図2は板状原石を用いた石核で、剥片剥離作業面はa面の1面だけに限定される。ズリ面の横長打面であるd面の長軸の右側に偏った部分を打撃している。この剥離はb面にまでおよび、石核側面を折り取るような剥離となった。この剥離以前にa面左下方からc面を打面とする打撃がみられるが、比較的小形の剥片が剥離されており、自然面の状況からも深く剥離が進んでいないので、まともな剥片は剥離されなかったものと思われるが、一つの作業面に対して、打面を変えて多方向から剥片剥離作業を行っている。d面を打面とする大きな剥離以前と思われる剥離がa面右下部に1枚残存している。周囲の自然面の状況から、d面を打面とするこれらの2枚程度が剥離された枚数と思われる。黒シマ入りのズリ面をもつ黒曜石である。

第2図3は板状の石核で、表裏両面に剥片剥離作業面がある。a面の剥離は横長の原石ズリ面であるd面を打面とし、横長打面の長辺ほぼ中央部を打撃して、a面のほぼ全体を剥離している。剥片剥離作業面の周囲はすべて自然面であり、剥離が深く進んでいない。

裏面のb面では、a面右側の自然面を打面とする剥離と、a面下側の自然面を打面とする2方向の剥離が見られる。まず、a面右側の自然面の下側を打面とした剥離が行われる。その剥離面を立てて打面を見ると、横長の打面であり、その長辺の片側に偏った部分を打撃している。この剥離の端部側に、同じ打面からの剥離面がかろうじて残存していることから、以前に剥離作業がなされていた可能性がある。

次にa面右側の剥離面が、打面を90度転位してa面下方の自然面を打面として剥離される。打面側に小規模な剥離があり、剥離端部側と段をなしているが、周囲の自然面や剥離面との関係を見ると、同一打撃で剥離されたと考えられる。打面は横長の自然面であり、その短辺を打撃している。

最後の剥離は、最初の剥離と同じ自然面打面に再び転位し、横長打面長辺の片側を打撃している。

いずれの剥離でも打点は明確でなく、リップの発達するものもあり、軟らかい素材のハンマーを用いた可能性がある。黒シマの入った黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図4は大きな原石を分割したと思われる分割面が、d面とe面上半部にみられる。この石核の大きな特徴は、最後に剥離されたa面右端でb面におよんでいる剥離面である。d面の分割剥離面を打面としている。その面は横長で、長辺の右端部を打撃している。非常に強い力で打撃されたと思われる。石核の端部を剥ぎ取り、剥片はウトラパッセとなっていると思われる。

この剥離以前に同一打面剥離がなされている。剥離は石核中央部で止まり、ヒンジフラクチャーとなっている。同一打面の左端部を打撃してもう一枚剥離がなされるが、前2者とは違い小規模な剥離である。

これらの剥離面の剥離方向とは反対方向の剥離がみられる。おそらくc面下方の剥離面を打面としたものと思われる。したがって、a面は複数の方向の剥離作業面である。

c面下方の剥離面は2枚の大きな剥離面の端部であり、剥片剥離作業面の存在を推定させる。この面を打面として細かな剥離群がc面からa面下部にかけみられる。打撃点が消れており、比較的硬い素材に押しつけたような剥離群である。

透明な黒曜石で、自然面は円錐転位面である。

第2図5は、a面の剥離面の内、d面の自然面を打面とした剥離は、反対面を剥ぎ取るウトラパッセ剥片を生み出したと思われるものである。周囲の自然面の状況から、この剥離以前にはあまり多くの剥離がなされていないものと思われる。a面右下部にはc面を打面とする小規模な剥離がみられ、端部が前記の剥離面を切っている。

a面の裏面のc面でも、d面を打面とした剥離が見られる。この剥離はa面の剥離に端部を切られており、a面の剥離以前に剥離されたと考えられる。また、右側端部が段をなしている。c面左下にはa面を打面とした小規模剥離がみられ、前記の剥離に切られており、さらにa面の小規模剥離にも切られている。c面右下部にも剥離面があるが、風化の進んだ古い剥離面であり、原石段階からみられたものと思われる。転位による風化自然面を持ち、くず湯状の不透明黒曜石である。

第2図6は、小形の原石の表裏に剥離作業面をもつものである。a面左側では、c面の横長自然面を打面としたウトラパッセ剥片を生み出したであろう剥離がみられる。a面左上方に自然面が残っており、原石の端部を剥離していることが分かる。a面右下部にはb面下部の自然面を打面とした小規模剥離がみられる。

この裏面のb面では、c面の横長打面の端部を打面とした剥離がみられるが、a面の剥離に大きく切り取られている。それ以前の剥離としてb面右端方向からの打撃で、前述の剥離と直行する方向の剥離がなされている。白シマが若干入る透明な黒曜石で、自然面はズリ面である。

第2図7は、これまで記載した石核とは違い、塊状の原石を用い、奥行きのある打面をもっている。a面では上下両方向からの剥離面がみられる。剥離作業面の中央部に自然面が残存し、剥片剥離があまり深く進んでいないものと思われる。一方、b面ではこれらの剥離作業で失われた打面からの大きな剥離の端部が残存している。白シマの入る半透明黒曜石で、ズリ面の自然面である。

第2図8は塊状の原石の3面に剥片剥離作業面が設定されている。最も剥離作業が進んだa面では、同一打面から4枚以上の剥片が剥離されている。最も古い石核下部の剥離面は両側に自然面があり、背面全体に剥離面をもつ最初の剥離であった可能性がある。a面左側面は全面自然面である。a面の打面であるc面はa面を打面とする比較的小規模な剥離からなる。また、b面はa面を打面とした1枚の剥離面である。自然面の残存状況から、残存する剥離面以上に石核消費が進んでいる状況は見受けられず、ほぼ原石の大きな状態である。

第1図9は、塊状の原石を素材としている。a面中央部



第2図 酒吞塚遺跡Ⅰ区11号住居跡出土石核と関連石器

の大きな剥離はd面の剥離面を打面としているが、a面左端部の剥離はd面左側の剥離に切られており、a面、d面の各剥離が打面転位しながら剥離された状況が把握できる。いずれの面も自然面の残存状況から、あまり深くは剥離作業が進んでいないものと思われる。b面では自然面を薄く剥ぎ取るように剥離がみられるが、a面下部の自然面を打面として2枚程度が剥離されている。

第1図10は塊状の石核である。a面にd面を打面とする同一方向の剥離が2枚みられる。他の作業面では、微細な剥離を除くと、b面、d面において1枚のみの剥離がみられ、自然面の状況からあまり深くは剥離作業が進んでいなかったものと思われる。白シマの入る半透明の黒曜石で、自然面はズリ面で、7・8・9も同様の黒曜石である。

4. 剥片剥離手法の復原

剥片剥離手法の復元にあたり、まず石核を類型化したい。形状では板状で横長の奥行きのない打面をもつもの(第2図1～6; I類とす)、塊状で奥行きのある打面をもつもの(第2図7～10; II類とす)とがある。I類にはまるで爪のように薄く小形のものがあ(第2図13、諸磯式b期の23号住居跡上層出土)、打撃時の特殊な石核保持法の存在が推定される。集針を行う際には、板状は幅が厚さの2倍以上のものとした。また、図示はしなかったが長さが幅の2倍以上のものを棒状石核(III類)とした。11住居層出土石核は17点あり、I類5点、II類は12点である。

次に剥片剥離作業面を類型化すると、1打面からの剥離面にのみ構成される単一方向作業面をもつもの(第2図1・3・8～10; a類)、同一作業面を複数の方向から剥離する複数方向作業面をもつもの(第2図2～7; b類)、打面転位があり作業面を複数もつもの(第2図3～10; c類)である。実際は3者の組み合わせである(第1表)。

第1表で、各時期の類型別の出現状況を見ると、形態では塊状のII類が板状のI類に比べやや多い状況で、各時期ともI類が4割前後、II類が3割前後、III類が1割程度であるという状況である。剥片剥離作業面の分類では、a類が8割前後の石核にみられ、b類が4～5割、c類が6～7割程度みられるという状況である。組み合わせ状況では、石核の形態にかかわらず、a類が何面かみられるもの(ac類)、a類とb類が組み合わさるもの(abc類)が最も多く各時期でみられる。b・c類の少なさが目立ち、同一作業面を複数方向から剥離する作業面であるb類は、それだけで出現することが比較的少なく、a類と組み合わせることで出現することが多い傾向が各時期の状況として言える。

そこで11号住居跡中層出土の剥片62点について、背面構成状況を観察してみた。背面が自然面のみのものが6点で、剥離面をもつものが圧倒的に多い。背面に剥離面をもつものの内、主要剥離面と同一方向の剥離面だけものが25点45%で、複数方向の剥離面をもつものが31点55%と過半数を占めている。石核では同一方向の剥離面であるa類が8割前後に見られる点と矛盾するように思われるが、作業面を

大きく剥ぎ取ってしまうため、剥離の履歴が剥ぎ取られてしまう状況が多いことが推定できる。

なお、複数方向の剥離面をもつものの剥離方向は、主要剥離面と同一方向の剥離面がみられるものが18点58%である。他の方向では、右方向から11点36%、左方向から14点45%、反対方向から11点36%で、同一方向より少ない。同一方向だけの剥離面を含めると43点77%に同一方向の剥離面がみられる。同一打面で複数回剥離する機会が多かったことを推定させる。2枚以上の剥離で剥片中央部に厚みを持たせたり、剥離面の切り合いによる鋭い刃縁部を確保したものと思われる。

しかし、剥離面のみで構成される背面を持つ剥片は21点34%と約1/3で、背面に自然面をもつものが過半数を占めている。背面の自然面が5割以上の被覆率のものが18点39%で、この内全面自然面のものも6点10%である。複数回の剥離作業を同一打面の同一作業面で行うことがまあるが、自然面が剥片に残ることが多く、剥離の枚数も限定的であったものと思われる。

ところで剥片の打面は厚みが薄いものが多く、点状打面が8点ある。これを合せて厚さ1mmのものが12点で3mmまでのものが22点で打面の残存する剥片38点の中の過半数を占める。厚さ3mm以内の打面の長さは1cm以内である。剥片の過半数は小さな打面が求められたと思われる。これは、石核の素材を意識したものと考えられる。

11号住居跡の石核は、自然面の残存状況からみて、あまり深くは作業が進んだ形跡がなく、1作業面で2～3枚程度の剥片が得られた程度と思われる。そこで、いずれの作業面においても自然面が残存するものを、あまり深く作業が進んでいない石核として把握し、各時期の状況をみてみた。諸磯式期で76%と最も多く、五領ヶ台式期36%、新道式期30%、猪沢式期27%、藤内式期32%、井戸尻式期34%、曾利式期39%という状況である。諸磯式期が他の時期の倍近くを占めている。小形の原石を剥離するため1枚の剥離で一つの面全体が剥離されてしまう状況が多々あり、自然面が残らない作業面が多くなることも考えられる。しかし、特に諸磯式期で、剥片剥離をあまり深く行わずに廃棄する傾向が強いことは認識する必要がある。

剥離面の特徴として、石核底部を剥ぎ取った、ウートラパッセ剥片を生み出したであろう剥離が目をはく。木住居跡中層出土の剥片中にウートラパッセ剥片がみられるが、折れているため、諸磯b式期の23号住居跡中層出土で、黒曜石製ウートラパッセ剥片を図示した(第2図11)。原石の角の部分をやわらかく打撃したものと思われ、横断面が三角形形状を呈する。打面が小さいため、打面側に先端部も3つ石核の素材とならう。第2図12(2号住居、諸磯b式期、上層出土)を石核の素材としての使用例として提示しておく。

各時期の石核底部を抜くような、ウートラパッセ剥片を剥離したと思われる剥離面のある石核は、諸磯式期で64%、五領ヶ台式期で57%、猪沢式期で50%、新道式期で50%、

第1表 酒香場遺跡Ⅰ区の石核類型

時期	I	II	III	Ia	b	c	Ia	Iac	Iabc	Ib	Ibc	IIa	IIac	IIabc	IIb	IIbc	IIIa	IIIac	IIIabc	IIIb	IIIc
藤内式期	14	17	3	29	17	26	2	5	5	2	0	2	7	5	2	1	0	1	2	0	0
%	41	50	9	85	50	76	6	15	15	6	0	6	21	15	6	3	0	3	6	0	0
五塚ヶ台式期	7	7	0	11	9	9	2	2	2	1	0	0	1	4	2	0	0	0	0	0	0
%	50	50	0	79	64	84	14	14	14	7	0	0	7	29	14	0	0	0	0	0	0
井戸尻式期	2	6	21	7	9	9	0	1	0	1	0	1	2	2	1	0	1	0	0	1	0
%	20	80	20	70	50	50	0	10	0	10	0	10	20	10	0	10	0	0	10	0	10
新道式期	9	15	2	24	10	16	4	2	3	0	0	3	5	5	1	1	2	0	0	0	0
%	35	58	8	82	38	62	15	8	12	0	0	12	19	19	4	4	8	0	0	0	0
藤内式期	18	22	4	39	16	31	2	6	7	3	0	5	12	3	2	0	1	2	1	0	0
%	41	50	9	89	36	70	5	14	16	7	0	11	27	7	5	0	2	5	2	0	0
井戸尻式期	12	16	4	27	12	18	7	2	1	2	0	3	7	5	0	1	0	1	1	2	0
%	38	50	13	84	38	56	22	6	3	6	0	9	22	16	0	3	0	3	3	6	0
曾利式期	15	17	1	29	12	23	4	4	4	0	3	5	7	4	0	1	1	0	0	0	0
%	45	62	3	88	36	70	12	12	12	0	9	15	21	12	0	3	3	0	0	0	0

藤内式期で43%、井戸尻式期で34%、曾利式期で39%と、時期を追うごとに漸減している。これは、ウートラパッセ剥片を必要とする石核が、あまり作られなくなった可能性がある。これと関連して、酒香場遺跡では石核の長さが、諸磯式期から五塚ヶ台式期で4cm台が最大であったのが、意次から藤内式期で3cm台、井戸尻から曾利式期で2cm台と小形化する傾向があり、この石核の変化に対応している可能性がある。

次に石核の大きさを、長さの数値を用いて検討してみる(第3図)。諸磯式期では3-3.4cmの区間が最も多く、6cmのものも最大大きい。五塚ヶ台式期から新道式期では2.5-2.9cmの区間が最も多くなり最大は5-5.4cmの区間にある。藤内式期から井戸尻式期にかけては前段階と同様に2.5-2.9cmの区間が最も多いが最大の区間が4.5-4.9cmと縮小化する。曾利式期も最大区間は同じであるが、次に多い2-2.4cmの区間が各時期で漸増し、この段階で最も多い割合を占めるようになる点が注目される。時期を追うごとに、小形の石核の占める割合が大きくなっていると思われる。なお、長さや幅の関係についても分散グラフを第3図に示しておく。

そこで、原石の長さについても検討したい(第4図)。把握できた資料数が少ないため、グラフにはつづきができていない。十分な成果とはいえないが、諸磯式期は他の時期に比べて大きいものが多い傾向はあるものと思われる。以上の検討結果からして、石核の小形化傾向は、剥離作業が進んで小さくなるというよりも、原石自体が小さいものが好まれる傾向があったものと推定される。

5. まとめと展望

旧石器時代の石刃技法などの剥離手法は、剥片剥離作業面において前の剥離でできた剥離面を意図的に剥片に取り込んで一定の形態の剥片を一定の手順を踏んで量産するよう手法であるが、今回分析した縄文時代の黒曜石剥離手法はそうしたのではない。石核は長さが2-3cm程度の小形のもので多く、同一剥離作業面では2-3枚の剥片を剥離する程度で、他の作業面に打面転位し、あまり石核を深く剥離作業を進めない。もともとの原石の大きさが小形

であるためと思われる、大きな原石を消費して小形化してゆく旧石器時代の剥片剥離手法との違いを示すものである。

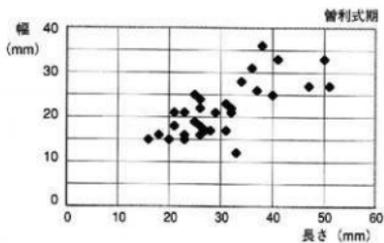
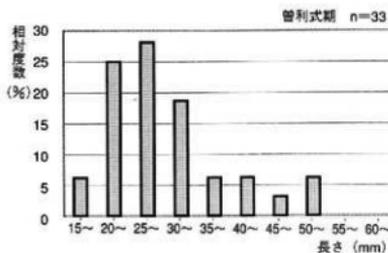
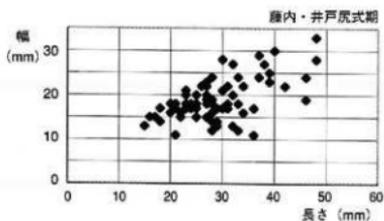
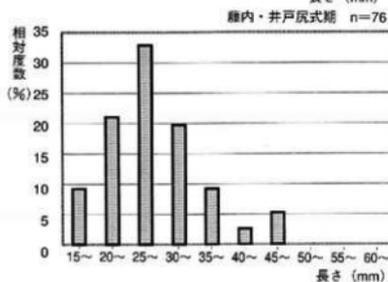
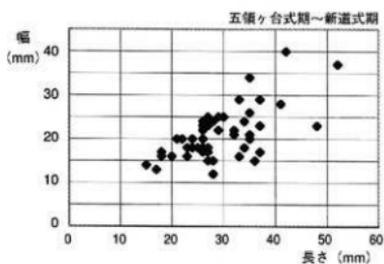
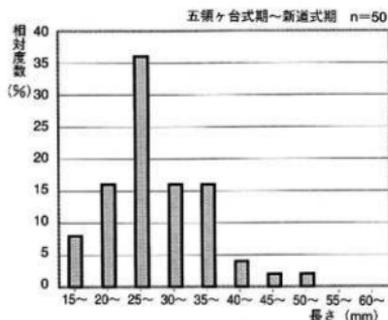
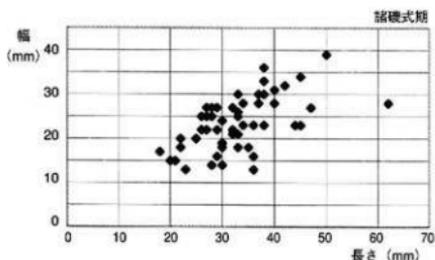
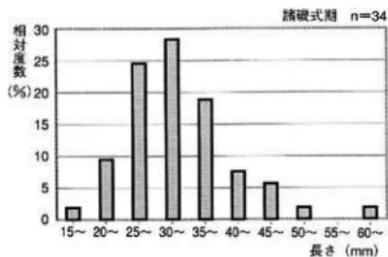
剥片剥離の目的は、石鏃、石錐、楔形石器、使用痕ある剥片などの素材となる剥片の剥離であり、それぞれ目的とする剥片の形態は異なる。使用痕ある剥片は最も多い石器と言えるが、その形状は一定しない。厚みのある縦長剥片をみかけると、これなど刃部を利用するための剥片と思われる。ただし、自然面があばた状の原石では鋭い縁辺が得られないため、剥離を兼ねて前の剥離で得た面と交差する縁辺を刃部として得るか、自然面がズリ面の原石を利用してズリ面と腹面とのなす鋭い縁辺を得たものと思われる。ズリ面は剥離面に近いなめらかな面なので、複数枚の剥離を行わなくとも鋭い縁辺が得られることから、好んで用いられたものと思われる。

一方、石鏃の素材の場合は、比較的薄く、断面が紡錘形で、平面が三角形の貝殻状剥片が目的剥片となったと思われる。剥片の周囲に厚みがあるものは不向きであり、当然、ウートラパッセ剥片などは石鏃以外の目的で剥離されたものと考えられる。なお、黒曜石製の石鏃については、大型の製品があり、ここで示したような石核から剥離された剥片では製作不可能である。大型の剥片を入手して製作したか、製品の状態で入手したのと考えられる。

特筆すべきは、石核底部を剥ぎ取るようなウートラパッセ剥片が剥離されている点である。この剥片は、おそらく石鏃の素材となったものと思われる。石鏃の小形化に対応して、ウートラパッセ剥離の減少や石核の小形化といった傾向も読み取れた。

板状石核の存在も注目される。奥行きのない横長の打面と、極端なものは爪のように小形で薄い。これらを剥離するには、打撃時の石核の保持方法を相当工夫しなければならないだろう。ウートラパッセ剥片の剥離も含め、剥離が石核下端に抜けるように、背面と側面の3点を保持して、打撃による衝撃を受け止めたものと思われる。第2図1・2にみられるような折れたような横割れも、側面の強力な緊張によって発生した可能性がある。これは、小形の原石に適応した剥離手法とみることができる。

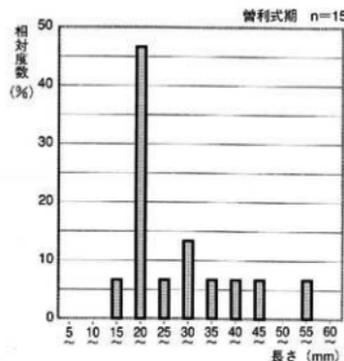
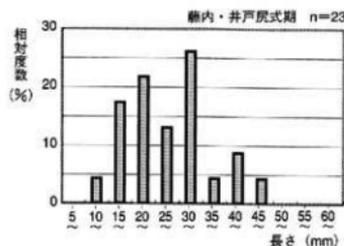
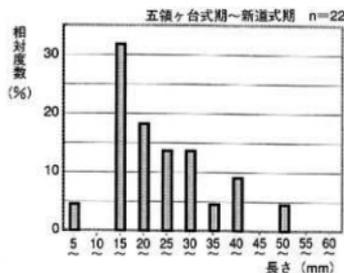
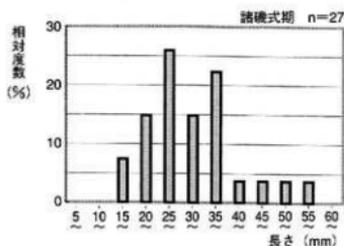
縄文時代の剥片剥離は、得られた素材を加工することに



長さ構成グラフ

長さとの関係グラフ

第3図 酒香場遺跡I区出土石核の長さとお幅



第4図 酒香場遺跡I区出土の原石の長さ

重点が置かれていたため、旧石器段階のような一定の形態の剥片剥離はなされなかったとされる。実際、一定の手順を踏んで剥片を量産する姿は見受けられず、一時に多量に石器生産するという状況に対応した剥離体系でないものと思われる。しかし、石錐素材のウートラパッセ剥片や、石錐素材を意識して、打面を極力小さくした剥離など、使用や加工の便を意識したある種の要件をもつ剥片がいくつかあり、しかも一つの石核から複数種類を剥離している。特定の器種が1・2点と臨時的に必要とされるため、その時に応じて石材をとりだし、必要とする要件を満たす剥片が剥離できる面を見極め、しっかり固定して1・2枚程度の剥片を確実に剥離して行く。そうした姿が想定できる。一時に多量の剥片を剥離して多量の石器をストックするというのではなく、補填が必要になった時に少数作り替える程度のものであったと思われる。それだけに、原石も小型で良かったと思われる。しかし一方で、原石は多量に原石状態で廃棄されている状況がある。これら原石が剥離できないからではなく、一定期間に原石群が交代した可能性も考えられる。こうした、原石の供給体制も含めて、信州系周礫石の剥片剥離体系は理解されねばならないであろう。

引用文献

- 田中英司氏 1977 「縄文時代における剥片石器の製作について」『埼玉考古』16号
- 山田昌久氏 1985 「縄文時代における石器研究序説—剥片剥離技術と剥片石器をめぐって—」[論集 日本原史]
- 保坂康夫 1990 「結語」『丘の公園第5遺跡』山梨県教育委員会・山梨県企業局
- 大工原豊氏 1996 「縄文時代(2)石器」『考古学雑誌』第82巻第2号
- 町田勝則氏 1996 「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法(1)—」[長野県の考古学(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集1]
- 長門町教育委員会・鷹山遺跡群調査団 2000 『鷹山遺跡群IV』
- 竹広文明氏 2003 『サヌカイトと先史社会』
- 保坂康夫 2005 「I区の石器」『酒香場遺跡(第1～3次)—船農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書(遺物編—本文編—)—』
- 酒香場遺跡の報告書は、山梨県教育委員会・山梨県農務部 1997 『酒香場遺跡(第1・2次)—船農試験場増・改築工事に伴う発掘調査報告書(遺構編)—』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第135集など7冊刊行された。

山梨県出土の畿内系叩き甕に関する覚書

—甲府市塩部遺跡の調査から—

小林 健二

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. はじめに | 4. その他の出土例 |
| 2. 塩部遺跡の概要 | 5. 出土の意義と問題点 |
| 3. 塩部遺跡出土の畿内系叩き甕 | 6. おわりに |

1. はじめに

弥生時代後期—古墳時代前期の上器様相については、その移動の背景—古墳の出現の問題—を中心に、1980年代後半から90年代にかけて非常に活発になった⁽¹⁾。さらに続く古墳時代中期の土器についても各地の様相が明らかにされた⁽²⁾。筆者もこの流れの中で山梨県における古式上器の成立について追求し、S字甕を中心とした東海系(伊勢湾系)の東日本でのいち早い波及と定着を軸に、北陸・畿内の影響をも踏まえ述べてきた経緯がある⁽³⁾。

このような動きも21世紀に入りやや落ち着いた感があるものの、各地で引き続き精力的に続けられている。一方筆者の方は、その後の本県の状況を顧みることなく、不勉強であったことをいささか反省している。そんな中、近年の調査で甲府市の中心部から畿内系の叩き甕がまとまって出土し、興味深い状況が確認されている。それは以前から筆者が気にかけていた問題の一つであり、関東ではこれまでかなり多く出土しているにもかかわらず、本県では出土例がほとんどなかったものである。

小稿では、甲府市塩部遺跡で発掘された資料を取り上げ、山梨県出土の畿内系叩き甕について考えてみたい。

2. 塩部遺跡の概要

塩部遺跡は、現在のJR甲府駅の西約1km先に位置し、甲府市中心部を南流する相川によって形成された扇状地の扇端部に立地しており、東西約500m、南北約700mの広範囲に及ぶ遺跡として台帳に登録されている。市街地にある遺跡ということもあり、大小様々な開発に伴う調査が行われているが、この中で大規模な調査としては、1995年に県立甲府工業高校校舎建替工事に伴い山梨県教育委員会が行ったもの(以下甲府工業高校地区)⁽⁴⁾、2001年—2004年にかけて都市計画道路改良工事に伴い甲府市教育委員会が行ったものがある(以下A—D地区)⁽⁵⁾。

甲府工業高校地区では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓11基・溝3条、弥生時代後期の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡8軒・水路・旧河迹跡など

が発掘され、古墳時代前期中葉の方形周溝墓からは最古級のウマの歯が出土している。

甲府工業高校地区に隣接するA地区においても、方形周溝墓の続きや同時期の遺構が確認されている。

B地区では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物跡20棟、平地建物跡3棟、掘立柱建物跡22棟、溝17条、古墳時代前期の方形周溝墓2基などが発見されている。C・D地区では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡23棟、平地建物跡5棟、掘立柱建物跡5棟、方形周溝墓2基、溝43条などが発見されている。

今回は全体図を用意していないため、各地区の位置関係がわかりにくいのが、このように塩部遺跡は甲府市内のこの地域の弥生時代後期から古墳時代にかけての拠点的な集落であったことを窺わせている。また、調査担当者が述べている通り、掘立柱建物跡が多いこともこの遺跡の特徴である。

3. 塩部遺跡出土の畿内系叩き甕

本稿で取り上げる畿内系の叩き甕は、C地区の24号溝及び1号方形周溝墓から出土している。

24号溝はこの集落の環濠とみられ、検出された長さは約23.5m、幅約2.4m、深さ約1mで、溝中には土器や木製品を含む炭化層(5層)が溝内全面に確認されている。この層は周囲に存在した建物などの「火災処理」に伴うものと考えられており、出土した土器・木製品の多くは2次的に焼けていた。

上器(第1図)には磁類(1—10)・甕類(20—46)・高杯類(14—16—19)・器台類(15)・鉢類(12・13)があり、この中で20—32が叩き甕である。平底で口縁部は丸く収められ内面はハケ調整である。なお、45は台付甕であるが、脚台部に叩き目が確認できる。共存資料を見ると、筆者分類1類のS字甕A類相当品(35)があり、時期決定の決め手となる。また手焙形土器(11)は、扁平な鉢型は時間的にはやや下る感じがあるが、同時期の東海系の影響を受けたものであろう。

木製品（第2図）は多くが建築部材とみられるが、47・48は機械部材であろう。

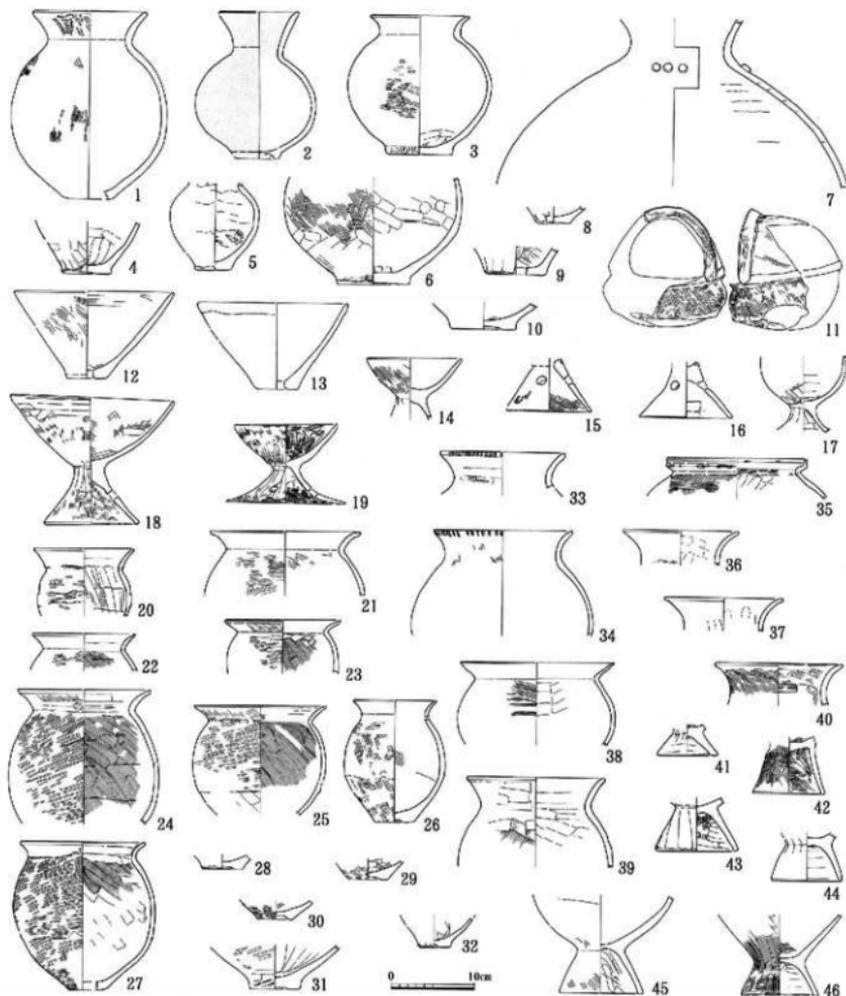
方形周溝墓はC地区では2基発見されているが、1号方形周溝墓は南北約17m、東西約19mの規模で南西隅のコーナーに1ヶ所ブリッジをもつタイプである。

出土土器（第3図）には、甕類（65～75）、壺類（63・64）、小型土器（60～62）がある。このうち65が叩き甕の

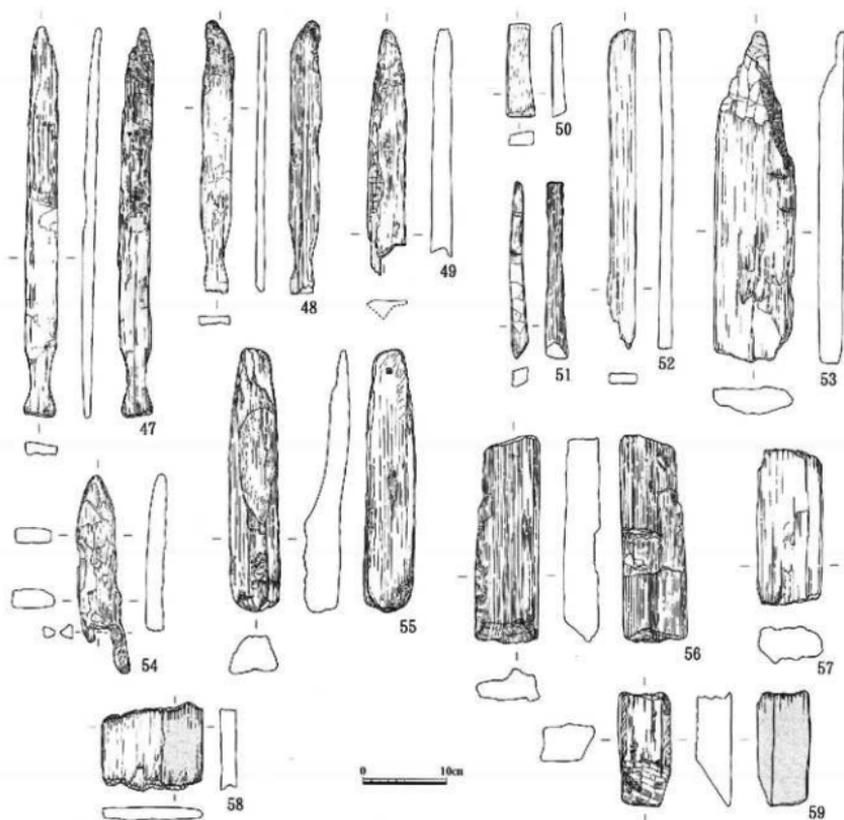
体部下半部で、やはりS字変A類相当品の脚台部（75）、東海系加前壺（64）⁽⁶⁾が目を引く。

さらに木製品を見てみると（第4図）、東海系曲柄鉢（76）⁽⁷⁾や、鐏の柄の部分と見られるもの（77）や、孔がつけられた板状のもの（92・94）、それに組み合わせて使用できそうな棒状のもの（90・97～104）などがある。

調査担当者が述べている通り、これらの土器や木製品に



第1図 塩部遺跡C地区24号溝出土土器（1：6）



第2図 塩部遺跡C地区24号溝出土木製品(1:6)

は焼けた痕跡は見られず、方形肩溝蓋の被葬者や葬送儀礼に関わるような土器・木製品が多数出土していることは大いに注目される。

4. その他の出土例

これらの他に県内で確認されている叩き甕は、甲府盆地西部の村前東A遺跡(南アルプス市)⁽⁴⁾で、口縁部から体部上部にかけての破片が1点(第5図105)ある。口縁端部は丸く、体部内面にはナデが確認できる。

さらにそれ以前から知られていた叩き甕といえば、富士山西麓の西一条遺跡(富士河口湖町)⁽⁵⁾で道路工事中に発見されたほぼ完形品(第5図106)が知られている。これも塩部遺跡出土のものと同様、口縁端部は丸く平底で、体部上半は粗いハケ、下半はミガキ調整されている。

5. 出土の意義と問題点

はじめにも述べたが、塩部遺跡で出土した畿内系叩き甕は、甲府盆地内でまとまって出土した例として初めてのものである。共存資料から24号溝と1号方形肩溝蓋の編年の位置を確認してみると、他にも東海系、北陸系が多数出土しており、報告されている通り、筆者編年古墳時代I期(庄内式併行期)である。

また形態的な特徴から、これらはいずれもV様式系の甕であり、庄内式のものではない。併行関係からも畿内のものではなく、V様式系の甕の伝統が甕内周辺の地域に系譜を持つものである。これは関東においても同じ状況であることは既に指摘されているところである⁽⁶⁾。胎上分析の結果も搬入品ではないことから、東海系の文物を介してもたらされた技法であろう。であるから、その系譜が分

布状況から既に言われているような西二河・久作川流域¹⁰⁾とは限らないと思われる。そして、畿内の影響が実際に現れるのは、筆者編年古墳時代Ⅳ期を待たなければならない。しかし、東海系のS字雲、北陸系の雲とともに直接的ではないが、畿内の雲の情報がこの段階で本県にももたらされたことは大きな意義がある。東海系の影響はもちろん強いものであったが、すべてが東海系ではないこと¹⁰⁾は各地の状況を見ても明らかである。

一方、1号方形周溝墓から出土した棒状・板状の木製品も重要な意義を持つ。折しも最近、甲斐鏡子塚古墳の周溝内から木柱や木製品が多数出土するなど、新たな発見があったところである¹⁰⁾。両墳墓の造営時期には約1世紀の時間差があり、十分な検証をせず直ちに結びつけることは問題があるが、少なくとも1号方形周溝墓での在り方はその後の葬儀儀礼に影響を与えている可能性は高い。

いずれにしても、これらの出来事は甲斐鏡子塚古墳が出現する前段階の、本県の状況の一端を示すものである。

6. おわりに

最新の調査結果をもとに、本県の畿内系印系雲を取り上げ、若干ではあるがその意義を考えてみた。極めて限定された資料であり、依然として出土例の少ないことには変わりはないが、今後系譜や分布について、もう一度整理し直してみる必要がある。

本稿を草するにあたり、塩部遺跡C地区の調査を担当された甲府市教育委員会の佐々木満氏に改めて感謝申しあげます。

註

(1) 例えば1993年の日本考古学協会新潟大会「東日本における古墳出現過程の再検討」における「新潟シンボ編年」ほか

- (2) 東国土器研究会1999「東国土器研究」第5号
 (3) 小林健二1998a「山梨県出土の東海系土器一波及定首と変容一」『山梨考古学協会誌』第10号 山梨県考古学協会

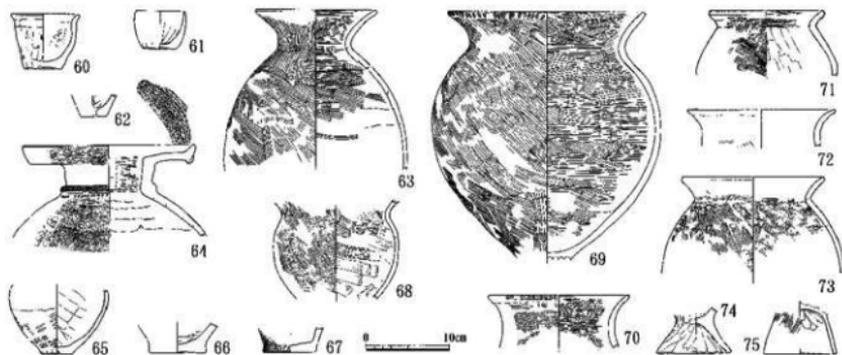
小林健二1998b「甲斐における古式土師器の成立一3・4世紀の土器編年と墳墓一」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会

小林健二1999a「塩山市西田遺跡B区2号住居跡出土土器の再整理」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

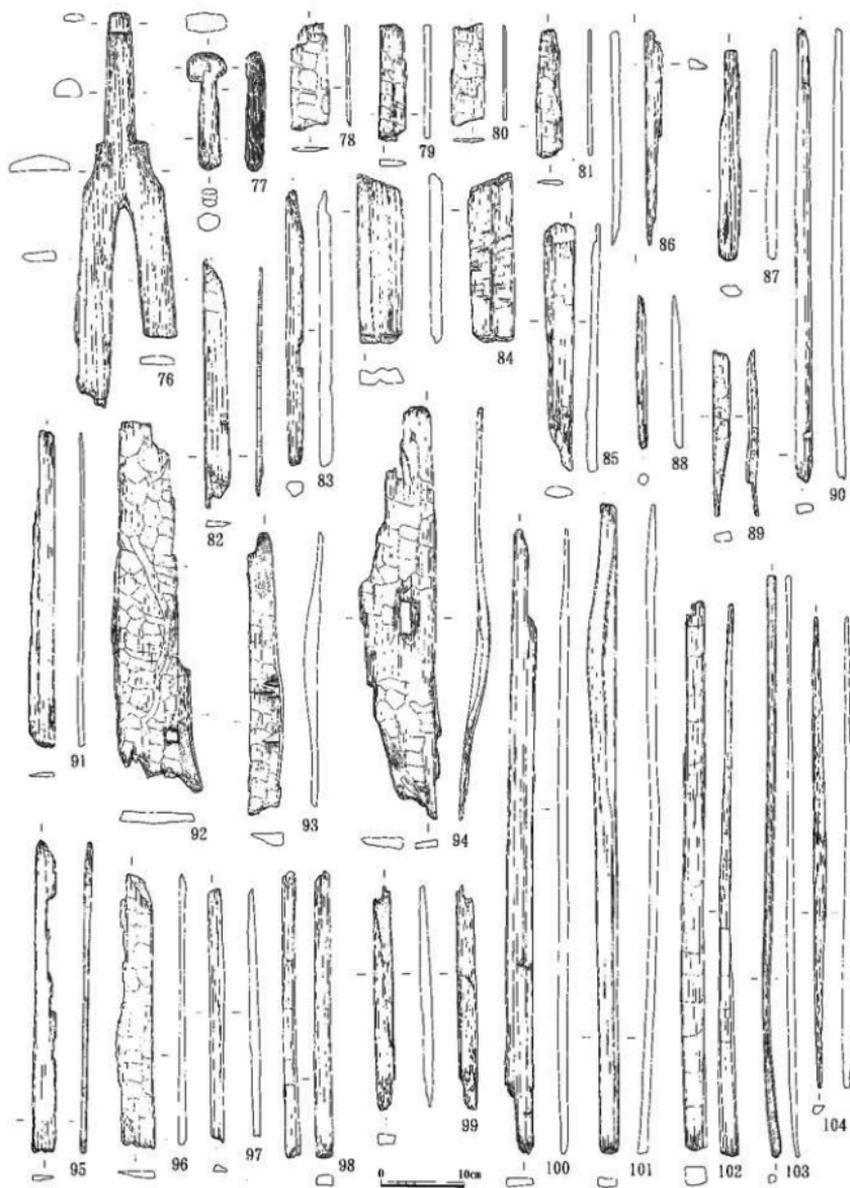
小林健二1999b「山梨県出土の北陸系土器」『山梨考古学論集』Ⅳ 山梨県考古学協会

小林健二2000「甲斐のS字雲を考える」『S字雲を考える』東海考古学フォーラム三章大会事務局

- (4) 村石真澄1996「塩部遺跡」山梨県教育委員会
 (5) 佐々木満2004「塩部遺跡Ⅰ」甲府市教育委員会
 佐々木満2005「塩部遺跡Ⅱ」甲府市教育委員会
 (6) 赤塚次郎1995「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7 考古学フォーラム
 (7) 樋上昇1993「木製農具研究の一視点—ナスビ形農具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3 考古学フォーラム なお、後に樋上氏は東海形曲柄鍬のうち伊勢湾周辺に分布しているものを「伊勢湾型曲柄鍬」と細分しているが、これに従えば「伊勢湾型曲柄鍬Ⅱ類」ということになる（樋上昇2000「東海形曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12 考古学フォーラム）
 (8) 三川村美彦1999「村前東A遺跡」山梨県教育委員会
 (9) 中山誠二1985「西一糸遺跡」『上九一色村誌』上九一色村誌編纂委員会 なお、この資料は現在山梨県立考古博物館で寄託を受け保管している。また、西八代郡上九一色村は平成18年3月1日に北部は甲府市と、南部は南部留部富士河口湖町とそれぞれ合併した。
 (10) 比田川克仁1993「東国における外来土器の展開」



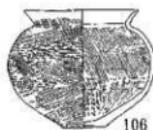
第3図 塩部遺跡C地区1号方形周溝墓出土土器(1:6)



第4図 埴部遺跡C地区1号方形周溝塞出土木製品 (1:6 103・104のみ1:12)



105



106

第5図 村前東A遺跡出土叩き甕(105)と
西一条遺跡出土叩き甕(106)
(1:6 106は筆者再実測)

『期古論集』久保智二先生追悼論文集刊行会

西川修・1992「関東における畿内系の甕について」

- 『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内式土器研究会
- (11) 与野浩 1996「弥生時代終末期～古墳時代前期の東海地方における畿内系の甕について」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』考古学フォーラム
- (12) 赤塚次郎 2005「廻間Ⅱ式の時代」『東日本における古墳の出現』東北・関東前方後円墳研究会編
- (13) 森原明廣 2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会

笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理

石 神 孝 子

- | | |
|-------------|----------|
| 1 はじめに | 3 管玉について |
| 2 亀甲塚古墳の研究史 | 4 まとめ |

1 はじめに

筆者は、近年刊行された山梨県史資料編(遺跡編)の中で、「亀甲塚古墳」の記載を担当する機会を得た。これが、筆者が初めて亀甲塚古墳の出土遺物に触れ、あらためて本古墳と向き合うようになったきっかけである。

本古墳は、昭和23(1948)年に主体部の発掘調査が行われ、その時に出土した盤竜鏡と管玉は、現在考古博物館に所蔵されている。盤竜鏡と管玉の実測図は、すでに坂本美夫氏によって作成されており、盤竜鏡は船載の漢式鏡であること、管玉は53点すべてが細管状の碧玉製で、一方向からの穿孔であると観察結果が述べられている(註1)。

しかし筆者は、管玉の穿孔部を観察するうちに、管玉の穿孔方法が両側穿孔ではないかと疑問を持つようになった。管玉が細く、肉眼観察では限界があると判断し、帝京大学山梨文化財研究所の鈴木稔氏に相談したところ、X線写真撮影の協力を得ることができた(註2)。今回その撮影結果をもとに、新たに実測図を作成し、ここにその調査結果をまとめるものである。

2 亀甲塚古墳の研究史

本題に入る前に、本古墳の研究史について、若干触れておこう。

本古墳は笛吹市(旧東八代郡)御坂町成田に所在し、甲府盆地を北東から南西へ流れる、笛吹川左岸に立地する(第1図)。

前節ですでに述べたように、本古墳は昭和23(1948)年に当時甲府二高教諭であった中島正行氏によって主体部の発掘調査が行われ、翌年には調査に携わった学生、村松真琴氏によってその概略が報告された(註3)。

その後、永峰光一氏は、「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」(註4)で発掘調査時に出土した盤竜鏡に着目し、さらに翌年の「古墳と環境—甲府盆地の場合—」(註5)の中で、本古墳を甲府盆地における「古墳時代の中期を形成する古墳」としてその性格を位置づけた。

坂本美夫氏は昭和51(1976)年に刊行した「甲斐考古」別冊2号(註6)の中で、盤竜鏡と管玉の実測図を掲載した上で、盤竜鏡が古墳時代前期から中期に多く見られるものであること、管玉が細管状で碧玉製である点から、弥生時代

の形態を保ち、しかも他の種類の玉類が見られないことから、管玉のみの首飾りであることを想定し、古墳の年代の下限の参考としている。しかしこれらの他に、現在は所在不明である直刀残片・矛残片・鏃・鏃(?)の類が出土したとされる点から、その組み合わせに着目し、東八代郡豊富村に所在する王塚古墳以前の前Ⅳ期(5世紀前半)に築造されたと推定している。

さらに出洋洋文氏は、昭和50・51(1975・76)年度に山梨大学考古学研究会が作成した本古墳の墳丘実測図を「丘陵」第9号に発表し(第2図)、本文中で「東八代郡誌」(註7)の記述や地元の人々の聞き取りから、「本古墳が前方部のごく小さな前方後円墳、あるいは帆立貝形の墳形」である可能性があることを提起した(註8)。

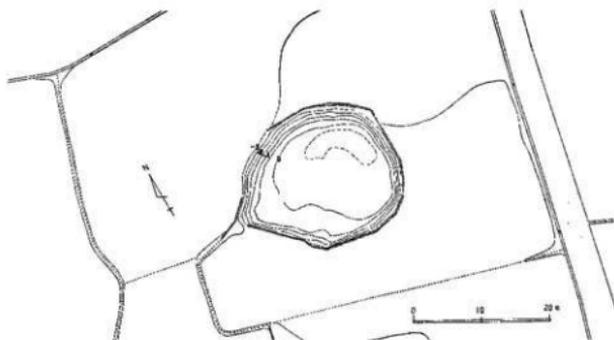
3 管玉について

第3図は今回新たに作成した管玉実測図である。合計53点が確認されている。このうち5点は破損しているが、4点は修復されている。また写真1はX線写真である。

長さは1cm以下のものが11点、1cm~1.5cmのものが40点、1.5cm以上のものが2点認められる。直径は0.3~0.4cmの範囲に収まる。いずれも細く、径は一定しているが、長さはばらつきが見られる。



第1図 亀甲塚古墳位置図



第2図 墳丘実測図 (S51 山梨大学考古学研究会作成)

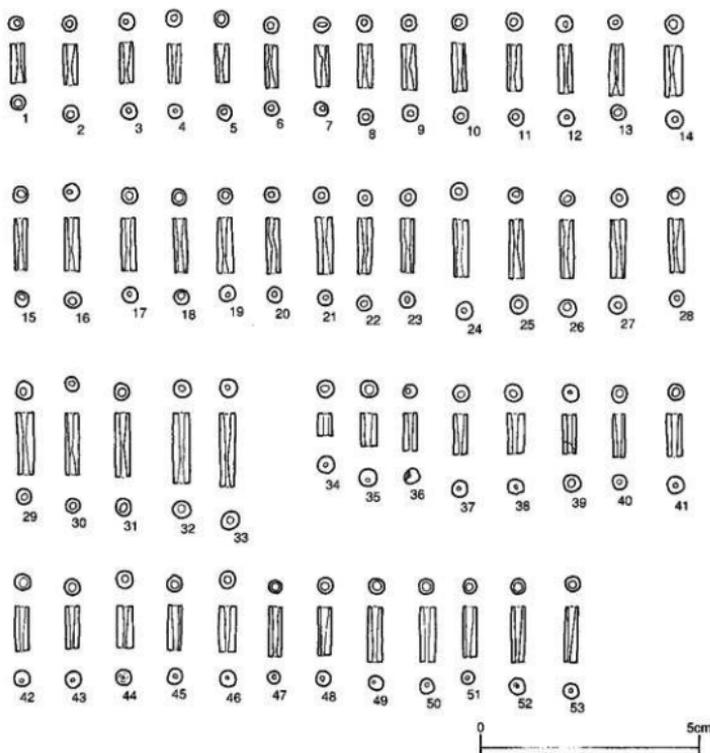
番号	長さ	径	色調	穿孔方法	その他	番号	長さ	径	色調	穿孔方法	その他
1	0.90	0.30	明緑	両側		28	1.25	0.35	緑灰	両側	
2	0.90	0.35	明緑	両側		29	1.45	0.40	浅黄緑	両側	
3	0.90	0.40	明緑	両側		30	1.45	0.30	浅黄緑	両側	破損
4	0.90	0.30	浅黄緑	両側		31	1.50	0.35	緑灰	両側	
5	0.90	0.30	濃緑	両側		32	1.65	0.40	濃緑	両側	破損
6	1.00	0.30	明緑	両側		33	1.70	0.35	緑	両側	破損
7	1.00	0.30	浅黄緑	両側		34	0.50	0.35	明緑	片側	
8	1.00	0.35	緑	両側		35	0.70	0.40	濃緑	片側	
9	1.05	0.30	浅黄緑	両側		36	0.90	0.30	濃緑	片側	
10	1.10	0.35	緑	両側		37	0.90	0.35	濃緑	片側	
11	1.10	0.35	緑	両側		38	0.90	0.40	濃緑	片側	
12	1.10	0.35	明緑	両側		39	0.90	0.35	明緑	片側	破損
13	1.20	0.35	濃緑	両側		40	1.00	0.30	濃緑	片側	
14	1.20	0.40	緑	両側		41	1.00	0.35	緑	片側	
15	1.20	0.30	緑	両側		42	1.00	0.35	まだら明緑	片側	
16	1.20	0.30	明緑	両側		43	1.00	0.30	緑	片側	
17	1.20	0.35	まだら明緑	両側		44	1.00	0.35	濃緑	片側	
18	1.25	0.35	濃緑	両側		45	1.10	0.35	まだら明緑	片側	
19	1.30	0.40	緑(明緑筋混じる)	両側		46	1.10	0.40	濃緑	片側	
20	1.30	0.35	濃緑	両側		47	1.15	0.30	緑	片側	
21	1.30	0.35	明緑	両側		48	1.15	0.30	明緑	片側	
22	1.30	0.35	濃緑	両側		49	1.30	0.35	明緑	片側	
23	1.30	0.30	明緑	両側		50	1.30	0.35	明緑	片側	
24	1.30	0.35	明緑	両側		51	1.20	0.30	浅黄緑	片側	
25	1.40	0.40	緑	両側		52	1.30	0.35	緑	片側	
26	1.40	0.30	まだら明緑	両側		53	1.30	0.30	緑	片側	破損
27	1.40	0.35	緑	両側							

第1表 管玉計測表

石材はいずれも碧玉製である。色調は緑色を呈するが、肉眼観察では濃緑色・緑色・明緑・浅黄緑4種類に分類が可能である。この色調の格差は、石材の違いであると推測される。とくに特徴的な浅黄緑色の管玉の一群は、それぞれの玉で、石材のまだらな状態も共通しており、これらは同じ石材から作り出された可能性がある。明緑色も同様である。濃緑色・緑色については、色調以外にこれといった特徴が見られず、一概に同じ石材であるとは断定しがたい。

穿孔方法は、両側から穿孔されたものが33点見られる。一方片側から穿孔されたものは20点である。第3図1~33

は、両側から穿孔された管玉である。孔の直径はおおよそ1.5~2.0mmで、玉の中央付近で孔が結合している。1.5cm以上を計る管玉2点も両側から穿孔される。一方34~53は、片側から穿孔されたものである。始点部分の径は大きいものでは2.5mmと、玉の壁がかなり薄くなってしまっているものも見受けられる。一方終点部分の径はおおよそ0.3~0.5mmである。終点部分は、玉の径が細いこともあってか、非常に丁寧に孔を穿っている様子が窺われ、ほとんどバリが見られなかった。片側穿孔を施した管玉は、長さが1.0~1.3cmのものが14点、0.5~1.0cmのものが6点であり、両



第3図 管玉実測図

側穿孔を施した管玉の1.4cm以上8点、1.0~1.4cmのもの20点、0.5~1.0cmのもの4点と比較すると、片側穿孔の管玉の方が小さめであることがわかる。これらのことから、管玉作成段階が、片側穿孔が取り入れられて固もない段階であった可能性を窺うことができるのではないだろうか。

4 まとめ

このように本古墳出土の管玉は、両側穿孔が施されたものが多数含まれることを確認した。現時点では、穿孔方法に両側穿孔を採用した管玉の一群は、甲府盆地では他に類例が認められない。下類の穿孔方法は、玉の種類や玉づくり集団、地域差や時間差など、様々な要因によって異なる。管玉に限って見てみれば、おおよそ両側穿孔から片側穿孔へ変遷するという流れは、様々な点で若干の差異があるにせよ、かなり広範囲で共通しているものと思われる。

ところで本管玉の特徴の一つである直径3mm前後のいわゆる細管状の管玉について、触れておこうと思う。本管玉

のように、0.2~0.4cmの径を持つ管玉は、弥生Ⅱ期に上限が求められる。このような管玉を製作した玉づくり遺跡は、第1段階のものとしてとらえ、兵庫県南部から伊勢湾沿岸に遺跡が点在する一方で、日本海側沿岸に沿って密に分布する(註9)。細管状の傾向は、弥生時代を通じて維持され、古墳時代に入っても残存するが、徐々に太管状へと段階的に移行する。

今回取り上げた管玉の特徴は、まず両側穿孔と片側穿孔の両方が採用されていること、さらに細管状であることがあげられる。両側穿孔で細管状であるという特徴はいずれも弥生時代の管玉の様相が色濃く、甲府盆地の管玉の中でも、古相段階に位置づけることが可能であるとと考えてよい。また具体的にこの管玉の一群が、盤電鏡と共存することは年代的にも矛盾はないと考える。

本古墳から出土した遺物は、現在管玉と盤電鏡しか伝えられておらず、詳細については不明であるが、この管玉と盤電鏡のみの共存関係を見る限りでは、現行の築造年代に



写真1 X線写真

は疑問を感じずにはいられない。また出月洋文氏が述べるとおり、墳丘形態も未だ不明瞭である。内部構造と墳丘形態、これらが明らかになれば、あるいは甲府盆地の出現期の古墳の様相の一端が明らかになる可能性も否定できないと思われる。

今後の亀甲塚古墳の調査に期待する。

投稿を起すにあたり、帝京大学山梨文化財研究所畑大介氏・鈴木稔氏・埋蔵文化財センター坂本美夫氏・保坂康夫氏・正木季洋氏にはご助言をいただいた。また帝京大学山梨文化財研究所鈴木稔氏には、管玉のX線写真を撮影していただいた。厚く感謝を申し上げます。

註

- (1) 坂本美夫 1978「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳等について」『甲斐考古』別冊2号
- (2) 管玉のX線撮影は、帝京大学山梨文化財研究所の協力により、2002年に実施した。
- (3) 村松真琴 1949「亀甲塚の調査」『郷土研究』7
- (4) 永峰光一 1950「甲府盆地における古墳出土鏡の新資料」『古代学研究』1
- (5) 永峰光一 1951「古墳と環境—甲府盆地の場合—」『国史学』56
- (6) 註1に同じ
- (7) 山梨県教育委員会東八代支会 1914『東八代郡誌』
- (8) 出月洋文 1982「御坂町亀甲塚古墳の墳丘実測調査」『丘陵』第9号
- (9) 河村好光 1986「玉生産の展開と流通」『生産と流通』岩波講座日本考古学3

山梨県における月待信仰について

— 二十三夜和讃(一) —

坂本美大

- 一 はじめに
二 和讃の概要

一 はじめに

月待信仰は、「特定の月齢の夜に人々が寄り合い飲食などをともしながら月の出をまつ行事」で、その目的が農業生産に根ざした一種の現世利益を求めたものである¹⁾。このような月待信仰の山梨県における状況について、かつて石造物、文献、二十三夜堂を中心とした分布状況等について検討を加えてきた。近世月待塔四二七基の分布からは、北巨摩郡下とその周辺の中巨摩郡地域、それ以上野原町、大月市、都留市とその周辺地域に実に九〇パーセントの分布状況がとらえられ、一大分布圏の存在が浮き彫りとなされ、これら以外の地域は、局地的に集中する傾向をとらえられる地域もみられるが、相対的には希薄ないし皆無の状況にあることも合わせて確認された。しかし、文献、二十三夜堂などからは、石造物の分布の確認できない地域においても、寺院の祭礼として月待行事が行われていたり、月待行事を行った二十三夜堂の存在、あるいは月待信仰の本尊である勢至菩薩が寺院の本尊となっていることなどから、そこに月待信仰の行われていたことを推定することができる。このことから、その濃淡は別として、さらに県内の広い地域において月待信仰の行われていた様子を明らかにすることができた。

月待信仰の具体的な行事形態についても、山梨市(山三富村)徳和地区で

- 三 和讃の検討
四 おわりに

行われていたおさんや講(二十三夜講)の行事形態を断片的であるが確認することができ、動行時に唱えられた念仏、講で使われた諸具など、一部であるが確認することができた²⁾。

今回、かつて月待信仰の中心的存在の動行で唱えられたであろう和讃を確認することができた。断片的であった行事形態の復元に、きわめて貴重な資料となろう。ここに、その記録と若干の検討を加え、月待信仰行事の一端を明らかにしたい。

二 二十三夜和讃の概要

(一) 本の体裁

確認できた和讃は、都留市都留ミュージアム図書館の蔵書中にあった。この和讃は、「なむあみだぶつ」と題した和綴じの私本(渡辺茂氏蔵)をコピーしたものである。本の表紙の材質は不明であるが、格子状の陰影がみられる。滲みもみられ、また、長年に渡り使用されていたためか、表紙はもちろん本文ともども角が手ずれして、丸く擦り減った状況を窺える。

本の体裁は、縦二六、三センチメートル、幅二・センチメートル程のもので、現在のB五版の大きさにほぼ該当する。本文は、罫紙に墨で仮名書きされ、一つ折りして綴じられている。本の題名も、手書きされたもので、

裏表紙には「昭和四年」なる印影と所有者名、それに「都留郡盛里村」なる住所が書かれている。特に住所の書かれていることは、月待信仰の行われていた地域を特定するうえで重要な点といえよう。

この本は、総頁数七〇頁に渡るもので、念仏講の和讃集といえるものである。この中の一つとして、二十三夜和讃が納められている。同様な形態は大日市賑岡地区で唱えられている「十二夜和讃も、念仏講の中で唱えられているもので、これからすれば、念仏講と月待講とが習合した念仏講の中で唱えられた二十三夜和讃といえる。和讃を唱える講に念仏講などがある。そのうち阿弥陀仏を唱える称名念仏では、「日待、月待と習合し、十九夜・二十三夜に行われる地区がある。この後者の例では念仏講が女人講と習合し、安産祈願・血不淨の清めを願って念仏を唱えている」と言われている。県内でもこの他に、南アルプス市(旧八田村)下高砂神明社境内所在の「二十三夜塔に、習合例がみられる。この月待塔には、二十三夜供養」銘のほかに「壽命頂礼大日如来」なる銘が合せて彫られている。大日如来が口待ちの本尊であることを考えると、日待信仰と月待信仰とが習合した例といえよう。本例も、盛里村地内で行われていた念仏講と月待講とが、いずれかの時点で習合したものと見える。このことから、都留地域でかつて行われた月待講の動行で唱えられていた和讃といえるであろう。

この和讃は、七五調を基本とし、一六句からなる。形態としては、「俗の和讃」の部類に入るものとおもわれ、月待信仰のために作られたものといえる。その内容から作られた時代まで特定することはできないが、郡内地域で月待信仰の盛んとなった江戸時代以降に作られたものであろう。身近なものを題材として作られた和讃といえる。

(一) 和讃の内容

二十二夜 和讃

あみだぶあみだぶ

あみだぶつ

なむあみだぶつ

あみだぶつ

きみよう ちようらい

てんじくの

二十二夜の つきさまを

つきつきまちらる

その人に

ふくとくあたえる

ごせいがん

かいこもあたれば

さくもよし

ふうふは三ふうふ

そろいます

みふうふそろふた

そのいへに

くらをたてます

七とまへ

一ばんをくらが

かねぐらで

二ばんをくらが

きぬぐらで

三ばんをくらが

いとぐらで

四ばんをくらが

まいぐらで

五ばんをくらが

南無阿弥陀仏

阿弥陀仏

佛命頂来

天然の

二十三夜の月様を

月々満ちる

その人に

福徳与える

ご語順

蚤も当たれば

作くも良し

大姉は三夫婦

揃います

三夫婦揃うた

その家に

葺を建てます

七戸(棟か)まへ

一番お蔵が

金蔵で

一番お蔵が

絹蔵で

二番お蔵が

糸蔵で

四番お蔵が

蘭蔵で

五番お蔵が

阿弥陀ぶ(仏) 阿弥陀ぶ(仏)

阿弥陀仏



第2図 二十三夜和讃(2)

いふくら

六ばんをくらが

衣服蔵

六番お蔵が

七くらで

七ばんをくらが

質蔵で

七番お蔵が

こくらで

そのくらたてたる

穀蔵で

その蔵建てたる

その人の

としをもうせば

その人の

歳を中せば

白ななつ

まご、ひご、やしやごで

百七つ

孫、曾孫、玄孫で

五十人

せんしゅうばんざい

五十人

千秋万歳

たかさご

めでたかりける

高砂の

めでたかりける

めでたけり

めでたかりける

めでたけり

以上、上段が「なむあみだぶつ」に記された「二十三夜和讃」で、下段がそれを現代語に直したものである。

三 和讃の検討

(一) 和讃の内容

次に、和讃の内容について検討を加えてみたい。

文頭にみられる阿弥陀ぶ(仏)から阿弥陀仏まで、仏・菩薩などに一身をかけて頼みごとをする意で、これは念仏で唱えられる文句である。その後、月待信仰の本尊への一身の呼びかけ、祈願を行う文句となる帰命頂来から「二十三夜の月様」に「請願とつづく。

これ以後は、請願により望みがかなえられるように、いろいろな福徳について、物語的に述べている。まず養蚕の出息がよく収益があり、作す

なほち米などの作物の作物もよく、豊作であり、しかも、三夫婦といった二代が健康なうちに一緒に生活をおくれることへの感謝を表している。そしてこのような幸福の中で、裕福の象徴である七つの蔵を建てたことを述べている。一番蔵が金(可ね)蔵、二番蔵が絹蔵(絹の反物を織る)、三番蔵が糸蔵(木綿の反物あるいはその反物を織る木綿糸)、四番蔵が蘭蔵(「まい」は蘭の方音。「めえかき」などの作業の言い方がある)、五番蔵が衣服蔵、六番蔵が質蔵(貸し付けの際の質料を納めた蔵)、七番蔵が穀蔵(米、麦、雑穀)である。

さらに蔵を建てた人物が、三夫婦揃ったということで、現在でも稀な百七歳といった長寿を与えられ、さらに沢山の孫などを得て、反映の久しく続くことを祝い、喜び、日出度いことと讃え、終わりとする。

このように、その目的が農業生産に根ざした、種の現世利益を求め、講を結んで祈願したことが確認できる。

(二) 現世利益

現世利益として請願したのは、健康、子孫繁栄、財物(蔵)である。このうちの蔵について、現任県内に残る民家の屋敷構えなどと比較してみた。ここで取り上げる民家は一七世紀前半から明治時代前期までの二〇例で、これらの中には付属建物として色々な蔵がみられる。屋敷内に配置された蔵のうち、特に多いのが文書蔵の八割方、次ぎに穀(米・樹)蔵の五割方、味噌(味噌部屋)蔵の五割方であった。例数が少ないものに生穀蔵、質蔵(七・ヒチ)、納屋蔵などがみられる。納屋蔵は、以外と少なく、これらの中では一例だけである。しかし、これらの屋敷には納屋部屋などの表記がみられることから、これらが納屋蔵に代わるものといえよう。そして納屋蔵は、色々な生産物、物品などを収納した蔵と考えられるものといえる。

次ぎにこれらと今回確認された和讃とを比較すると、一致するものは穀蔵、質蔵といった僅かなものに過ぎない。しかし、納屋蔵については、前述

民家名	住所	付属建物						年代
		文庫蔵	穀蔵	質蔵	味噌蔵	座敷蔵	納屋蔵	
上野正氏住宅	山梨市東	文庫蔵	穀蔵	質蔵	味噌蔵	座敷蔵		17世紀前半
萩原貞夫氏住宅	春日居町鎮目	文庫蔵	穀蔵		味噌蔵	座敷蔵		19世紀中期
竹井義明氏住宅	塩山市三日市場	文庫蔵	穀蔵					17世紀後半
風間朔太郎氏住宅	塩山市千野	文庫蔵						19世紀前半
八田政統氏住宅	石和町八田	文庫			味噌蔵			17世紀後半
大須賀和夫氏住宅	境川村石橋		米蔵	ヒ子蔵				18世紀末期
塚田一作氏住宅	豊富村高部				味噌蔵			17世紀末期
神田泰正氏住宅	増穂町春米	文庫蔵						19世紀前半
安藤勢八氏住宅	甲西町西南湖	文庫倉						18世紀前半
藤巻 傳氏住宅	甲西町鮎沢	文庫蔵						17世紀後半
穂坂鶴義氏住宅	櫛形町高尾				味噌蔵			明治前期
矢崎徹之輔氏住宅	白根町有野	文庫蔵						17世紀前期
内田正明氏住宅	玉穂村権桑寺	文庫蔵	穀蔵		味噌部屋			19世紀中期
中島克巳氏住宅	八田村野牛島		穀倉		味噌蔵		納屋蔵	19世紀前期
中島信次氏住宅	双葉町宇ノ谷	文庫蔵				座敷蔵		18世紀中期
名取俊男氏住宅	垂崎市穂坂町		穀蔵		味噌蔵	座敷蔵		19世紀中期
八代英蔵氏住宅	明野村上手	文庫蔵						19世紀初期
風間巖氏住宅	武川村牧原		穀蔵		味噌蔵			19世紀前半
小佐野倍彦氏住宅	富士吉田市上吉田				(味噌蔵)			18世紀末期
星野奇氏住宅	大月市大月	文庫蔵	籾蔵		味噌蔵			19世紀前半

第1表 県内民家の付属建物

のようにいろいろな物を取納したものと考えられることから、和讃ではこの中に納められたものを一つずつ具体的に痛蔵、糸蔵、蒲蔵、衣服蔵などとしたものと考えられる。従って、痛蔵の対象となったものが、生活の中に根差したもので、かつ周辺にみられる棺福のシンボルの物資であったことを確認できる。

(二) 和讃中にみられる印について

和讃中に、いくつか記号のようなものがみられる。まず、「つきつきまぢる」の文頭に「●」の印が付けられ、さらに同様な印が段下の文頭に一行おきに、規則的に付けられる。次に「てんじく」と「の」の間に「上」、「さくもよ」と「し」の間に「○」、「そのいへ」と「に」、「あねぐら」と「で」、「くぐぐら」と「で」、「百なな」と「つ」それに「たかさ」と「の」の間にそれぞれ「◎」、「いとぐら」と「で」、「いふぐぐ」と「ら」との間に「一」の印が付けられている。これらの印には、どこを唱えているのか分かるように、例えば「●」印はその規則性などから付けられた印のように思われる。また、これと違う印については、和讃を唱える場合の調子、抑揚などの場所を分けるように、その印として付けられたものではないかと考えられる。

六 おわりに

都留市域にある川「都留郡監里村」で行われていた月待信仰の和讃について取りあげてきた。現在は行われていないが、月待信仰で行われた勤行の復元には欠かせない資料となる。和讃については、現在でも大月市藤岡町地区で、二十三夜の和讃が唱えられていることが確認できている。今後、本和讃との比較を行い、内容、地域性の有無などを検討してみたい。

最後に、調査に際して渡辺茂、岩村善吾、杉本悠樹、堀内亨の各氏にご援助、ご教示を賜った。厚くお礼申しあげたい。

註

一、桜井徳太郎 「月待」『日本歴史大辞典』 昭和三七年。

二、その後、四八基の月待塔が新たに確認され、県内での総数が四二七基となった。特に旧須玉町、旧明野村での追加数が増えた。また、盆地東部の山梨市においても多くの追加の確認があり、盆地東部も盆地西部・都留郡地域ほどではないが、月待塔の集ながみられる地域といえるようである。

三、拙稿 一九九三「山梨県における月待信仰について 特に石造物の展開を中心として」『研究紀要』十周年記念論文集 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

四、拙稿 一九九九「山梨県における月待信仰について」文献を中心として『研究紀要』一五 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

五、拙稿 二〇〇〇「山梨県における月待信仰について 塩山市小塚歌の二十三夜堂を中心に」『研究紀要』一六 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

六、拙稿 二〇〇〇「山梨県における月待信仰について」三番村徳和のおさんや講を中心として『山梨県考古学協会誌』一五 山梨県考古学協会

七、註一に同じ

八、多屋頼俊 一九三二「和讃史概説」 法蔵館

九、山梨県教育委員会 二〇〇〇「山梨県の民家」

一〇、山梨県史編纂委員会 二〇〇〇「山梨県史」文化財 山梨県

所在地	種類	形式	年代	銘	文
正栄寺 志空	十二夜塔	自然石型	一八二二	文政六未年臘上 二十一夜塔	
正栄寺 道祖神場	十二夜塔	自然石型	一八三三	八月二十日 四人 大保四月 月吉日 十二夜塔 講中九人	
水井 墓地人口	十二夜塔	自然石型		二十一夜供養	
戸崎 莊崎町宮久保 鳥ノ小池	十二夜塔 等付型	箱形	一七二八	二十一夜供養 念一夜 講(不動明王像) 奉供養 享保十二年 施主十人 八月 地主	
總取町上今井 上組道祖神場 鳥ノ小池	十二夜塔	角柱型 (山)	七五六	寶曆六〇歳 本待念二夜供養 五月廿日 講中十人 安永五〇天	
總取町宮久保 鳥ノ小池	十二夜塔	自然石型	七七六	念二夜勤至菩薩 奉 庚申供養塔	
綱平	十二夜塔	碑面型	一八〇四	講(化凡)祀	
總取町宮久保 鳥ノ小池	十二夜塔	角柱型 (山)		本待二二夜供養塔 大納至觀世音菩薩 講願主田 平造立 庚申背面全開 講(〇〇〇)	
旧道堂町 法喜院	十二夜塔	自然石型	一八二六	二十一夜塔 同文天九戌十二月日	
旧八田村 下高砂 神明社社境内	十二夜塔 舟型		一七二〇	宝永七庚申年 團全頂礼人日如来 (大日如来尊) 二夜月待供養 穴水生民 小寺占拝日	

所在地	種類	形式	年代	銘	文
旧白根町 在家塚 北向日藏 旧大和村 水野山 山梨市 上岩下八四 番地先	十二夜塔 (勢至菩薩)	箱形	一七六二	〇四十二〇 待大勢至菩薩等 一月廿三日 講中	
山梨市 上岩下八四 番地先	七夜塔	角柱型	一八〇一	七夜待供養 享和二戌年 当村 快壽 瀧器 自觀	
北 八四番地	十二夜塔	自然石型	一八二六	廿廿二夜 同文政九戌十一月 講中	
市川 金比羅神社	十二夜塔	舟型	一八五二	廿三夜 同文政九戌九月廿日 講中	
西 一、二七番地	十二夜塔	自然石型	一八六八	廿三夜 帶慶安西〇歳 惠開寺康園 二月十二日 下組中	
下神内川	十二夜塔	自然石型	一八六九	廿三夜 (横) 明治二五月日	
一丁出中 不動尊	十二夜塔	自然石型	一九二二	廿三夜 講願野井太郎 日野原善作 飯島利太郎 飯島良藏 飯島勝太郎 向山康造 磯野傳太郎 出草川房太郎 磯野幸太郎	
万力 諏訪神社	十二夜塔	自然石碑 面型	廿一夜	廿一夜 (巻) 一番に神風の 中澤 草丸 吹く野梅可那 嗚呼速く流礼南立 来に今季春能水	
歌田 二二八番地	十二夜塔	自然石型	二十一夜		

所在地	種類	形式	年代	銘	文
旧藤沼町 菱山 (江方形)	十二夜塔	自然石型		廿三夜	神職武井宗象贈書
旧中津町 心経寺	十二夜塔	自然石型	一八三二	天保四年 二十夜塔 十一日 中	
旧上野原町 西原田和 バス停	十二夜塔	自然石形	一七五〇	寛延三年 供養念三夜講中 酉原(人名)	
旧秋山村 大月市	二十六夜塔	自然石	八八九	明治廿一年内九月日	
梁川町 中野畑	二十三夜塔	箱型	一八七六	明治九年	
扇山山道	二十六夜塔	自然石形		廿六夜塔 同七月九日	

※本表の追加資料は、踏査のほか、次の文献から取り上げた。

明野村 九九五 『新装 明野村誌』 石造物編

山梨市 一〇〇一 『山梨市の石造物』

須玉町 一〇〇一 『須玉町史』 社寺・石造物編

研究紀要1号～21号執筆者一覧

- | | | | | | |
|----|--|---|--|---|--|
| 1号 | 坂本美夫
新津 健
小野正文 | 甲斐の郡(評) 郷制
金生遺跡発見の中古土器と2号壺石
縄文時代早期・前期初頃の土器について
一 釈迦堂遺跡群を中心として一 | 中山誠二
小林健二
森 和敏
森原明彦
半山 俊
坂本美夫 | 甲斐弥生土器編年の現状と課題
一時隔輪の設定一
外來系から在來系へ一甲斐のS字襷の変遷一
柱の礎石のある壺穴式住居址
山梨県地域における内耳土器の系譜
甲府城の史的位一甲斐国鎌倉期研究序説一
山梨県における月信信仰について
一特に石造物の展開を中心として一 | |
| 2号 | 保坂康夫
小野正文
新津 健
中山誠二
坂本美夫 | 山梨県下の先上器時代資料の検討一
一 所産陶器形十個に就て
石剣考
一中部、関東を中心とした出土状況から一
甲斐における弥生文化の成立
辻金具・雲珠考 | 10号 | 長沢宏昌
五味信吾 | 甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の上城墓
と土器棺再考
一井ノ尻皿式一甕形1式別の場合一
野代幸和
山梨県北巨摩郡人妻村甲一原遺跡出土埴輪の産
地特定(1)一外耳吸収スペクトル分析一
新津 健
高橋みゆき |
| 3号 | 長沢宏昌
田代 孝
末木 健
坂本美夫
笠原安夫・
越沢 浅 | 縄文時代前期末一中期初頃の土器炊事にみられ
る編物痕について
山梨の三角埴形土製品
甲斐国巨摩郡の成立と展開
甲斐国府一その環境と展望一
越沢 浅
上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定
付記 種子検出方法と、検出種子の意義について | 11号 | 吉里 学
田代 孝
柏木秀俊
高野玄明
小野正文 | 縄文時代の石器再考一打製石斧(1)一
中世六十六部郡の事柄経緯について
近世村平瓦の分類について一甲府城を例にして一
馬道塩平一窪平線並幅工事に先立つ牧尻町出土
遺跡調査報告
甲府市八幡神社採集の縄文土器 |
| 4号 | 長沢宏昌
中山誠二
小林和昭 | 山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について
弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造
縄文時代の土器について | 12号 | 坂本美夫
吉岡弘樹
柏木秀俊
佐野和規
澤登正仁
人谷清水 | 剣菱形古葉型の陪葬制とその背景
緑塚古墳についての平家
近世軒丸瓦の分類について一甲府城を例として一
山梨県考古資料の教材化
一学校現場へのアンケート調査に基づいて一
歴史教育実践と考古学の関連についての一考察一
一考古学の成果を取り入れた授業から考えたこと一
エング心理学を導入した縄文時代の論議文の解釈 |
| 5号 | 末木 健
森 和敏 | 甲斐仏教文化の成立
甲府盆地における条里型地割の事例 | 13号 | 田代 孝
長沢宏昌
保坂康夫
大庭 勝 | 近世の回廊塔と回廊経緯
御留市山谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について
山梨県下の遺跡・住居址の変遷と通史的考察
考古資料の教材化についての一考察一 |
| 6号 | 浅利 司
森原明彦
保坂康夫
河西 学 | 給条体土器を有する土器について
一中込遺跡出土の資料を中心に一
関東地方におけるカマド初現をめぐって
立石遺跡発掘調査報告
一1989年国道358号線拡幅等に伴う調査一
立石遺跡での先上器遺物を包含する地層 | 14号 | 新津 健
山本茂樹
森 和敏
野代幸和 | 山梨県における後晩期上層の展開
清里バイパス第1遺跡の陥穴の若干の検討
4基の前方後円墳の設計一山梨県における一
野代幸和
鈴木由香 |
| 7号 | 中山誠二
今福利忠
千野裕通
松谷曉子
外山秀一 | 身洗沢遺跡における外來系土器の課題
身洗沢遺跡出土の木製品
身洗沢遺跡出土の櫛歯について
身洗沢遺跡出土の植物種子について
山梨県身洗沢遺跡の立地環境と耕作 | 15号 | 李 映福 | 長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の
移動および縄文文化への影響
縄文時代前期後半から中期初頭段階における異
系統土器の流入の様相について
一川梨原に見た青土事例を中心に一
縄文時代前期後段土器から中期河室形土器へ
一御坂町村野遺跡出土土器に関する一考察一 |
| 8号 | 新津 健
出月洋文
岡島慎男
河西 学・保坂康夫
松谷曉子・長沢宏昌 | 金生遺跡出土の土器1(後期)
両の本神社遺跡出土の須臾器長頸瓶について
山梨県甲府市相川河床から発見されたナウマン
ノコ臼燻化石について
明野村中村遺跡遺跡出土炭化物について | 9号 | 磯貝正義
保坂康夫
今福利忠
新津 健
末木 健 | いわゆる「東国造」について
群許と個体消費の関わりについて
騎馬式土器成立期の集落関係
縄文時代中期後半の集落②
一千葉縣高根木戸遺跡の構造と意義一
縄文時代生所活動と土器組成分析 |

新津 健	縄文晩期後半遺跡分布の意味と課題 —山梨県における遺跡の連続性と立地から—	田中宗博	発掘調査と並行した資料普及活動に関する一考察
山本茂樹・網倉邦生	甲斐遺跡発掘調査報告 (平成10年3月3日から3月26日)	坂本美夫	山梨県における中・近世石塔資料
小林公治	吉川純子・植原岳二 大月市御所遺跡から検出された動物骨遺体とその性格(1)	18号 新津 健	縄文中期約手上器考②
笠原みゆき	大月遺跡の散石住居跡について	笠原みゆき	塩瀬下原遺跡出土の散石住居跡について
保取康夫	御物使用扇状地の古地形と遺跡立地 —中部横断道の試掘調査の成果から—	三森鉄治	山梨県内における出土銭貨の現状と課題
河西 学	中部横断道試掘調査のテフラ分析	小林 健	諏訪川岸跡出土の地面子について
小林健二	塩山山西遺跡B区2号住居跡出土土器の内整理	宮久保真紀	甲府城内審判御酒造所について —因幡フインの発祥地甲府—
石神孝子	山梨市役所寺占堀採集の須恵器について	福島浩二・小林公治	大月市大月遺跡(第7次調査)出土の動物骨遺体
雨宮加代子	山梨県内出土土製品について	奥水達司	横針山久保遺跡出土黒曜石のフィッシュトラック年代測定
嶋田 哲	甲府城の鬼門守護と除災招福の思想 —稲荷輪軸にみる一考察—	坂本美夫	山梨県の中世石仏 —地蔵石仏(光背形)を中心として—
坂本美夫	<資料紹介>高松町旗本横溝前庭地所在の地蔵 隔別版碑	19号 保取康夫	台形様石器にみられる「急角度微細加工」の実験的検討
坂本美夫	山梨県における月信信仰について —文献を中心として—	三田村美彦	山梨の縄文時代早期土器群終末期前後の検討
16号 長沢宏昌	山梨県における縄文時代早期木柵の様相 —田中地域と郡内地域—	小野正文	山梨県の木島式土器について
小林公治	中野益男・中野賢吉・長田正宏 散石・散石類、石器と注1土器の使用法に関する一事例 —大月遺跡出土縄文土器・石器に対する残存 形跡的分析結果と考古学的検討—	新倉邦生	大神遺跡出土石靴の起源と系譜
野代恵子	方形周溝墓にみられる儀礼的埋葬に関する一視点 —規川村諏訪尾遺跡の事例より—	長沢宏昌	山間地の淡茅と打欠石蓮の川途
保取康夫	東原遺跡の平安時代集落の構造 —実年代軸の設定と集住表集落の試み—	新津 健	上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺
野代幸和	橋本赤谷(東下)遺跡出土輪軸の形態と製作 年代について	五味信吾	山梨県北巨摩郡人妻村甲斐遺跡出土琥珀の産地 地特定(2) —その後の研究成果とともに—
宮里 学	県指定史跡甲府城跡の地鎮祭痕 —数寄屋障子門周辺の遺物集中心地とその意味—	野代恵子	首の通る土偶(2) 〜雷〜という機能の可能性〜 (研究メモ) 山梨県における筒状土器後半期の 需給
雨宮加代子	考古博物館カルチャークラス「銅鏡づくり教室」 での銅鏡の製作について	今福利恵	湯巻把手状装飾土器の展開 —湯巻突起型土器から湯巻把手器へ—
坂本美夫	山梨県における月信信仰について —塩山市小堰敷の二十一夜堂を中心として—	小林広和	米倉山B遺跡出土六釘銭と煙管・火打金に関する 基礎的研究
17号 三森鉄治	道々木木遺跡の上馬と上馬祭祀の起源	長田 泉	寺川政華・宮里 学 福留橋内丁事における強度試験監視計測について
宮久保真紀	甲府城跡域における美小川の遺地について —麓風水師の思想と甲府城—	橋岡美季江	穴欠に関する一考察—甲府城跡石垣の事例より—
保取康夫	望月町跡・池谷谷之 照原石原産地と石材の搬入・搬出 —丘の公園第2遺跡の原産地調査から—	宮久保真紀	甲府城跡審判御酒造所生住に関する語史料につ いて
三田村美彦	山梨県における早期縄文土器群後半の様相 —淡合坂遺跡出土土器の検討を通じた考察—	浅川一郎	甲府盆地の液状化に関する資料
田中 剛子	弥生時代の大形打製石斧は農具か —山梨県出土事例をもとに—	村石眞澄	土層堆積観察記録の課題
依田幸浩	御物使用扇状地北部の雲石展開について —大塚遺跡・石橋北塚遺跡を中心に—	野代幸和	土器に施された文様とその意味について(一試案) —中部西南地域の少型灰吹衣装束に見られる その文様から—
小柳美樹	大塚遺跡における副葬石斧への理解 —「中国四川省古代文物展」を通じて—	北垣恵一郎	月波山村「お松ひき」にみるソリについて
古柳弘樹	塩瀬下原遺跡出土の釣手上器について	雨宮加代子	動物形土製品を素材とするアンケートから 〜これは何に見えますか?〜
潮川修一	縄文文化財センターが行う学校への教育普及活 動に関する一考察 —「総合的な学習の時間」にどのように対応し たらよいか—	坂本美夫	山梨県の中世石仏—塩山市延命堂の三仏—
		20号 保取康夫	天神宮遺跡の煙管・配石 人面・土偶装飾付有孔飾付土器の研究
		藤辺 誠	湯巻把手状装飾土器の本場
		小林 健	甲斐国巨摩郡における古代牧についての一視点
		今福利恵	山梨県の中世石仏—六地蔵石仏(車輪) —
		坂本美夫	
		21号 藤辺 誠	人面装飾付釣手上器の再検討
		木本 健	甲斐と河内との馬
		今福利恵	甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧 についての一視点
		坂本美夫	山梨県の中世地蔵—地蔵塚地蔵石仏—

研究紀要 22

発行日 2006年3月31日

編集・発行 山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3881・055-266-3016
E-mail: kouko-hak@pref.yamanashi.lg.jp
(考古博物館)
E-mail: maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp
(埋蔵文化財センター)

印刷 株式会社 ヨネヤ

BULLETIN
OF
YAMANASHI PREFECTURAL
MUSEUM OF ARCHAEOLOGY
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF
YAMANASHI PREFECTURE
NUMBER 22
CONTENTS
MARCH 2006

A study of Jomon age vessels antheropomorphic decorations in Yamanashi Prefecture	Makoto Watanabe	1
Reconstruction of Round-Gravel Rectangles —Flagstone-Floored House at <i>Shiozeshimohara</i> Site—	Takeshi Sueki	11
Flaking technique in Jomon period —Analysis about obsidian cores excavated at <i>Sakenomizu</i> site—	Yasuo Hosaka	27
A memorandum of the Kinai Style Jar excavated in Yamanashi Prefecture —From the excavation in <i>Shiobe</i> Site, Kofu City—	Kenji Kobuyashi	35
The arrangement of <i>Kudatama</i> excavated in <i>Kamenokoh zuka-Kofun</i> , Misaka town of Fuefuki City	Takako Ishigami	41
A study on Religious Beliefs of " <i>Tsukimachi-shinko</i> " in Yamanashi Prefecture —Psalms on " <i>Nijo-sanyu</i> " ,Twenty-third Moonlit Night—	Yoshio Sakamoto	54 (1)